令和７年度
「専門職業人材の最新技能アップデートのための
専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業」

事業名

多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得のための
研修プログラム開発事業

事業成果報告書

学校法人彩寿学園

目次

１．構成機関・構成員等 1

２．事業の実施体制 3

３．事業の内容.....4

1.事業の趣旨・目的等について 4

2.開発する講座の概要.....5

3.具体的な取組.....5

i. 計画の全体像..... 5

ii. 今年度の具体的活動..... 7

iii. 実施した実証講座の概要 16

４．巻末　資料.....72

シラバス 74

教材　PBL③.....86

教材　PBL②改訂版.....98

教材　PBL①改訂版.....110

企画書 完成版　STEP 3 段階.....164

企画書 完成版　STEP1 段階.....178

知識教材 200

知識教材（確認問題） 242

1. 構成機関・構成員等

●事業構成機関

本事業は、学校法人彩寿学園を中心に、教育機関・介護事業者・IT 企業等 18 機関で構成し、各機関が専門性に応じ役割を担い、委員会で推進する。

教育機関

名称		役割等	都道府県名
1	学校法人彩寿学園	事業推進管理・事務局	滋賀県
2	学校法人秋葉学園	情報提供・開発・実証	千葉県
3	学校法人こおりやま東都学園	情報提供・開発・実証	福島県
4	学校法人河原学園	情報提供・開発・実証	愛媛県
5	学校法人清永学園	情報提供・開発・実証	石川県
6	学校法人青池学園	情報提供・開発・実証	福井県
7	学校法人岩永学園	情報提供・開発・実証	長崎県
8	学校法人智帆学園	情報提供・開発・実証	沖縄県
9	社会福祉法人華頂会	情報提供・開発・実証	滋賀県

企業・団体

名称		役割等	都道府県名
1	滋賀県国際介護・福祉人材センター	情報提供・評価	滋賀県
2	介護福祉教育コンソーシアム	情報提供・評価	東京都
3	ぬくもりグループ医療法人誠安会研修センター	情報提供・調査・実証受講者・評価	奈良県
4	株式会社日本ヒューマンサポート	情報提供・調査・実証受講者・評価	埼玉県
5	株式会社日本介護医療センター	情報提供・調査・実証受講者・評価	大阪府
6	株式会社ファーラウト	情報提供・調査・実証受講者・評価	東京都
7	株式会社ヘルスアンドメディカル	情報提供・調査・実証受講者・評価	東京都
8	ジャパンヘルスケアサービス株式会社	情報提供・調査・実証受講者・評価	東京都
9	株式会社万燈	情報提供・開発	東京都

●事業推進に関する取組

事業推進を主導する実施委員会を３回、調査・開発の項目を具体化する分科会を３回開催する。その際、委員の状況に合わせ、対面とオンラインのハイブリッド形式を基本とする。

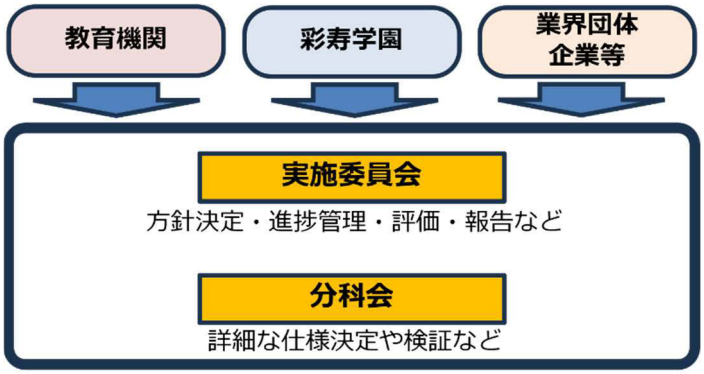
実施委員会の構成員

氏名		所属・職名	所在
1	齋藤桂三	学校法人彩寿学園・理事長	滋賀県
2	秋葉英一	学校法人秋葉学園・理事長	千葉県
3	大本研二	学校法人こおりやま東都学園・理事長	福島県
4	河原成紀	学校法人河原学園・理事長	愛媛県
5	越中屋薫	学校法人清永学園・理事長	石川県
6	青池浩生	学校法人青池学園・理事長	福井県
7	岩永城児	学校法人岩永学園・理事長	長崎県
8	儀間智	学校法人智帆学園・理事長	沖縄県
9	加藤英材	社会福祉法人華頂会・理事長	滋賀県
10	朴春代	ぬくもりグループ医療法人誠安会研修センター・講師	奈良県
11	東宗樹	滋賀県国際介護・福祉人材センター・センター長	滋賀県
12	谷田部賢一	介護福祉教育コンソーシアム・事務局	東京都
13	久野義博	株式会社日本ヒューマンサポート・代表取締役	埼玉県
14	谷口直人	株式会社日本介護医療センター・会長	大阪府
15	島岡潤	株式会社ファーラウト・取締役	東京都
16	加藤勝利	株式会社ヘルスアンドメディカル・代表取締役	東京都
17	島辰夫	ジャパンヘルスケアサービス株式会社・代表取締役社長	東京都
18	佐々木雄哉	株式会社万燈・代表取締役	東京都

2. 事業の実施体制

本事業では、学校法人彩寿学園が事業主体として事業推進の管理と事務局としての業務を行った。また、連携機関との事業実施体制として、実施委員会と分科会を設置した。

実施委員会では本事業のすべての連携機関が参画し、事業全体の方針・計画決定を行い、進捗の管理や実施内容の評価、全体への報告を行った。分科会は調査・開発・実証に関して、詳細な仕様決定や検証を行った。



本事業の連携機関による実施体制

各機関の役割

【教育機関】
①介護士の養成に関する情報提供
②実証講座実施会場の提供
③評価指標・カリキュラム・シラバスの設計補助

【業界団体】
①介護現場の実態に関する情報提供
②実証評価

【介護事業者】
①介護現場の実態に関する情報提供
②実証講座受講者の募集補助
③アンケート及びヒアリング調査への協力
④実証評価

【その他企業】
①それぞれの持つ知見や情報の提供

３. 事業の内容

1.事業の趣旨・目的等について

介護の現場では、日本人介護士と外国人介護士が共同して働くケースが増加している。しかし、言語や文化の違いからコミュニケーションのギャップが生じることがあり、スムーズな業務遂行に支障をきたすこともあることが課題となっている。
このような状況の中でも、自然言語生成 AI の活用が容易になったことにより、AI を介して言語の壁を取り払い、円滑なコミュニケーションを実現することが可能になり始めている。また、分析型 AI によってコミュニケーションや業務を「見える化」し、効率的な情報共有や業務の把握をサポートすることより、介護現場におけるコミュニケーションや業務の改善点を明確にすることができる。様々な AI ツールの導入により、日本人介護士と外国人介護士が共に働く「多国籍共生介護現場」の環境を整備することが可能である。
　本事業では、多国籍共生介護現場のマネージャー及びその候補者を対象としたリカレント教育プログラムの開発と実証を行う。ここでは PBL（Problem Based Learning）の手法を用いて、日本人と外国人介護士がスムーズに会話、申し送り、日誌の作成などのコミュニケーションを図りながら業務を遂行するための環境を整備する知識・スキルを身に着けることを目指す。

基本情報	内容・目標等
対象とする職業・分野	介護福祉・医療
学習ターゲット、目指すべき人材像	多国籍共生介護現場におけるマネージャー
対象者のレベル（当該プログラムの内容に関する基礎知識の有無）	介護現場のマネージャーまたはその候補者
プログラム受講後に想定される受講者のキャリア・受講者が目指す姿	AI を活用し多国籍共生介護現場の環境を整備するマネージャー
開発するプログラムの目標受講者数	２０人
開発するプログラムの想定総授業時数	６０時間以上
開発するプログラムの想定受講期間	２～３か月
ｅラーニングの実施の有無	有

2.開発する講座の概要

多国籍共生介護現場のマネージャー対象 AI 導入研修。

3.具体的な取組

i. 計画の全体像

【令和 5 年度】
●調査に関する取組
◎介護施設へのアンケート調査
介護施設を対象に、外国人雇用の現状や日本人と外国人の協働の課題に関する調査を実施する。
◎介護職員へのヒアリング調査
様々な属性の介護職員を対象に、現状の課題や研修へのニーズに関する調査を実施する。
◎先端技術導入事例調査
介護・医療・サービス業等における AI 等の先端技術の導入・活用事例に関する調査を実施する。
●開発に関する取組
◎カリキュラムの策定・評価指標の開発
リカレント教育プログラムのカリキュラムを策定する。また、受講者の知識・スキル・コンピテンシーの評価のための指標を開発する。
◎教材のプロトタイプ試作
知識学習のための e ラーニング教材と知識・スキル・コンピテンシーを身につけるための PBL 教材のプロトタイプを試作する。
●実証に関する取組
◎プレ実証講座
プロトタイプ教材を使い、小規模な実証を行う。
●事業推進に関する取組
◎会議
事業推進を主導する実施委員会を 3 回、調査・開発の項目を具体化する分科会を 3 回開催する。その際、委員の状況に合わせ、対面とオンラインのハイブリッド形式を基本とする。

【令和 6 年度】
●開発に関する取組
◎シラバス開発
前年度に策定したカリキュラムをもとに、科目の概要、学習内容、到達目標、教材といった項目を具体化し、シラバスを開発する。
◎改訂版教材と追加教材の開発
令和 5 年度のプロトタイプ教材に関し、分科会での検討やプレ実証講座等の結果をもとに、改訂版と追加する教材を開発する。
●実証に関する取組
◎実証講座
これまでに開発した教材を活用することにより、リカレント教育プログラムの実証講座を実施する。令和 6 年度においては、令和 5 年度のプレ実証講座より教育内容を拡大した実証となることを想定している。
その結果は、令和 6 年度及び令和 7 年度の開発に関する取組の方針決定において活用する。
●事業推進に関する取組
◎会議
事業推進を主導する実施委員会を 3 回、開発・実証の項目を具体化する分科会を 3 回開催する。その際委員の状況に合わせ、対面とオンラインのハイブリッド形式を基本とする。

【令和 7 年度】
●開発に関する取組
◎カリキュラム・シラバス・評価指標の改訂
令和 6 年度の実証講座の結果を基礎資料とすることにより、カリキュラム・シラバス・評価指標といったリカレント教育プログラムの骨子等を必要に応じて追加・改訂を行う。
◎改訂版教材と追加教材の開発
令和 6 年度に開発した教材に関し、分科会での検討や実証講座の結果をもとに、改訂版と追加する教材を開発する。
●実証に関する取組
◎実証講座
これまでに開発した教材を活用することにより、リカレント教育プログラムの実証講座を実施する。令和 7 年度は令和 6 年度より規模を拡大した実証となることを想定している。
●コミュニティ構築に関する取組

◎多国籍共生介護コミュニティ
教育プログラムの受講者や修了者を中心として介護人材に対して広く開かれたコミュニティを構築することにより、成果を共有していく。
●事業推進に関する取組
◎会議
事業推進を主導する実施委員会を 3 回、開発・実証の項目を具体化する分科会を 3 回開催する。その際委員の状況に合わせ、対面とオンラインのハイブリッド形式を基本とする。

ii. 今年度の具体的活動

●開発に関する取組
リカレント教育プログラム開発として、令和 7 年度は以下の 2 種類の取組を実施した。
◎シラバス開発
令和 6 年度には、PBL①～③の 3 科目および基礎知識習得を目的とした e ラーニング形式の 5 科目を含む、合計 8 科目、６０時間で構成されたカリキュラムを設計した。これらの科目について、学習目的や学習形式、科目概要、学習時間数などの観点から検討を行い、カリキュラムとして策定した。これにより、受講者が実際の職場で AI を活用するための理論と実践を総合的に学べる構造が形成された。さらに各科目の概要、学習項目、学習スケジュール、到達目標、使用教材といった項目について具体化的に記述することによってシラバスを開発した。
令和 7 年度は、令和 6 年度に実施した実証講座の結果（受講者アンケート、学習定着度テスト、施設からのフィードバックなど）を基礎資料とし、カリキュラム全体の適切性を再評価し、より実効性の高いシラバスへと改訂を行った。

カリキュラム

学習形式	学習目的	科目名	科目概要	時間数
同期型集合学習	知識・スキルの習得 コンピテンシーの獲得	PBL①	各受講者の職場において、ニーズや課題を分析し、AI ツールの選定を行ったうえで、導入計画の資料を作成する。	20 時間
		PBL②	集合授業において、受講者は発表やグループ学習を行い、フィードバックを分析する。	20 時間

		PBL③	各受講者の職場において、導入計画の改訂を行う。それをもとに実際の職場で AI ツールを導入・活用し、効果や課題を評価する。	10 時間以上
非同期型 e ラーニング	知識の習得	多国籍共生介護の重要性と課題	日本人と外国人の協働介護現場の意義や利点、重要性や言語・文化の違いによる課題を理解する。	2 時間
		AI 技術の概要と介護及びその隣接分野	AI の基本的な概念と、AI 技術が介護や隣接分野においてどのように活用されるかを具体的な事例を交えて紹介する。	2 時間
		AI 導入における課題と倫理的考慮事項	AI 導入に伴うプライバシーやセキュリティ等の課題やリスク、倫理的な考慮事項について学ぶ。	2 時間
		導入事例の分析	多国籍介護現場における AI ツール導入の成功事例、課題などをケーススタディで分析学習する。	2 時間
		導入計画の作成方法	AI ツールの導入計画の資料の作成方法や記載するべき項目・要素について学ぶ。	2 時間

今年度は、検討結果を踏まえ、各科目の概要、学習項目、スケジュール、到達目標、使用教材などを具体化し、シラバスを作成した。各科目の学習内容を整理し、体系的なカリキュラムを構築することで、学習の効果を高めることを目指した。具体的には、到達目標を明確に設定し、各学習項目が適切に組み込まれるよう調整した。さらに、使用教材についても精査し、学習内容に最適なものを選定した。これにより、各科目の教育内容がより充実し、学習者にとって理解しやすいシラバスを開発することができた。

●開発したシラバス

（シラバス一例）PBL③

科目名	PBL③
科目概要	施設代表者は、PBL②で得たフィードバックを受け、自施設の状況に合わせて AI ツール導入企画案を見直し、企画書を改訂する。必要に応じて、AI ツールの導入や一部業務での試行を行い、実際の業務の中でどのような効果が得られたか、また運用上どのような課題が生じたかを整理する。その結果を企画書に反映し、導入方法や運用体制を見直すことで、今後の本格導入に向けた改善点を具体化する。また、各施設での取組結果を自施設のスタッフと共有するとともに、他施設の事例や工夫を参照することで、自施設だけでは気づきにくい視点を取り入れる。これらのプロセスを通じて、現場で AI ツールを導入・運用する際の判断力と実践力を高め、最終的に自施設における AI ツール導入企画書を完成させる。
対 象 者	多国籍スタッフが既に就労している、または今後の採用を検討している施設の中堅職員・リーダー、実務者
学習目標	1. PBL②で得たフィードバックを踏まえ、自施設の状況に合わせて AI ツール導入企画案を見直し、具体的な内容に改訂できる。 2. AI ツールを必要に応じて導入・試行し、実際の業務の中で得られた効果や課題を整理・評価できる。 3. 試行結果をもとに、導入方法や運用体制の改善点を整理し、今後の実装に向けた修正案をまとめることができる。
学習形式	ハイブリッド学習（e ラーニング：非同期型＋集合学習：同期型）
時 間 数	10 時間　※事前学習 2 時間＋集合・演習 8 時間の計 10 時間で構成する。
学習項目	**1．事前学習（e ラーニング学習・2 時間）** **目的：導入・改善・定着** ・「導入計画」（令和 5 年度テキスト第 5 章） AI 導入を一度に進めるのではなく、段階的に検討・実施していく考え方を理解する。導入ステップの整理、小規模な試行（パイロット）の進め方、導入後の効果や課題の確認・評価方法を把握し、PBL③での実践・検証に備える。 ・「施設に応じた AI 導入モデル」（令和 7 年度テキスト第 5 章） 自施設の業務内容や多国籍共生介護現場としての特性を踏まえ、AI 導入モデルをどのように構築・定着させていくかを整理する。試行結果をもとに改善を重ね、継続的な運用につなげる視点を養う。 **2．オリエンテーションと現状分析・導入計画策定（1 時間）** ・オリエンテーションと PBL③学習の進め方の説明

	・現状分析と課題共有（手間のかかる点やボトルネックの特定） ・導入計画の検討と情報収集（複数機器の情報収集と比較検討） ・まとめと質疑応答 **3．自施設におけるデジタル機器活用の共有と効果検証（4 時間）** ・自施設におけるデジタル機器活用状況の共有 PBL②で整理したフィードバックシートおよび導入計画の改訂内容を踏まえ、自施設で実施したデジタル機器の活用状況や試行結果を整理し、関係職員と共有する。 ・現場ニーズを踏まえた活用方法の検討 実際の業務や多国籍スタッフとの関わりの中で生じた課題をもとに、導入計画どおりに進まなかった点や、運用上工夫が必要だった点について整理し、より現場に合った活用方法や運用上の工夫についてディスカッションを行う。 ・導入効果の確認と評価 業務効率、業務負担、多国籍スタッフとのコミュニケーションの変化等の観点から、デジタル機器導入によって得られた効果や新たに見えてきた課題を整理・評価する。 ・まとめと質疑応答 自施設での取組結果を振り返り、今後の改善や継続的な活用に向けた視点を整理する。 **4．職場を変えるデジタル機器導入計画の改訂と実践に向けて（3 時間）** ・PBL③の導入および趣旨説明 PBL①・②およびPBL③前半の取組を踏まえ、本セッションが導入計画を最終的に整理・改訂する段階であることを確認する。 ・デジタル機器導入・運用に関する基礎的な考え方の整理 導入後の運用体制や役割分担、継続的な見直しの視点について整理する。 ・デジタル機器導入計画の改訂作業 フィードバック整理シートや効果検証の結果を踏まえ、自施設の状況に即した導入計画へと改訂する。 ・実践を想定したシミュレーション 改訂した導入計画をもとに、実際の業務場面を想定し、運用上の課題や対応方法を確認する。 ・振り返りとまとめ PBL③全体の取組を振り返り、今後の本格導入に向けた検討事項を整理する。
到達目標	1．PBL②で得たフィードバックを踏まえ、自施設の状況に合わせて AI ツール導入企画案を見直し、具体的な内容に改訂できる。

	2. AI ツールを必要に応じて導入・試行し、実際の業務の中で得られた効果や課題を整理・評価できる。 3. 試行結果をもとに、導入方法や運用体制の改善点を整理し、今後の実装に向けた修正案をまとめることができる。
評価方法	1. 導入計画の改訂状況：PBL②で得たフィードバックを踏まえ、自施設の状況に応じて AI ツール導入企画案が適切に見直され、具体化されているか。 2. 試行・検証の取組状況：必要に応じて AI ツールの導入や試行が行われ、業務上の効果や課題が整理・評価されているか。 3. 改善点の整理と説明力：試行結果をもとに、導入方法や運用体制の改善点が整理され、今後の実装に向けた修正内容を説明できているか。 4. 主体的な取組姿勢：自施設の課題に向き合い、検証や振り返りに主体的に取り組んでいるか。
備考	参考文献： 厚生労働省：「介護ロボット等による生産性向上の取組に関する効果測定事業 報告書」 https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/001491508.pdf 厚生労働省：「令和 5 年度 厚生労働省 老人保健健康増進等事業 介護ロボットの効果的な導入支援に関する調査研究事業」 https://www.nttdata-strategy.com/services/lifevalue/docs/r05_105_02jigyohokokusho.pdf

●改訂版教材と追加教材の開発

本事業では、受講者が知識・スキル・コンピテンシーを総合的に習得することを目的として、個人学習用の e ラーニング教材と、集合型のグループ学習を支援する PBL 教材を開発した。令和 6 年度においては、カリキュラム全体の中でも中核となる PBL の第一段階「PBL①」（課題設定と AI 導入計画の立案）および第二段階「PBL②」（計画発表とフィードバック分析）に対応する教材について、初版の完成版を作成し実証講座を実施した。さらに PBL の第三段階である「PBL③」（実際の職場における AI 導入と評価）に対応する教材のプロトタイプ版を開発した。また、これら PBL 学習に先立ち必要となる基礎知識として、AI の概要、多国籍介護現場の特徴、倫理的課題、導入事例、計画作成手法などを扱う 5 つの知識学習科目について内容の見直しを行い、それに対応する個人学習用 e ラーニング教材を改訂することによって開発をした。

令和 7 年度においては、令和 6 年度の分科会での議論および実証講座の受講者から得られた定性的・定量的なフィードバックに基づき、教材の内容精度および現場適合性の向上を図るため、既存教材の改訂および不足箇所の補完を目的に改訂することによって開発した。

具体的には、「PBL①」「PBL②」に関して、理解しやすさや導入事例の多様性、演習問題の難易度などを再調整し、事例の更新、課題文の表現改善、ディスカッション支援ツールの整備などを行った。さらに、最終段階である「PBL③」に対応した教材の完成版を開発した。「PBL③」では、受講者が作成した導入計画を現場で実践し、その成果や課題を検証・報告する活動が中心となるため、チェックリスト、観察記録シート、効果測定テンプレート、報告書作成支援ガイドなど、職場実装を前提としたツール類を整備し実証講座を実施した。また、個人学習用の e ラーニング教材においても、受講者間での意見交換を促すソーシャルラーニング機能を組込むことで、より実践的な学習環境を構築した。

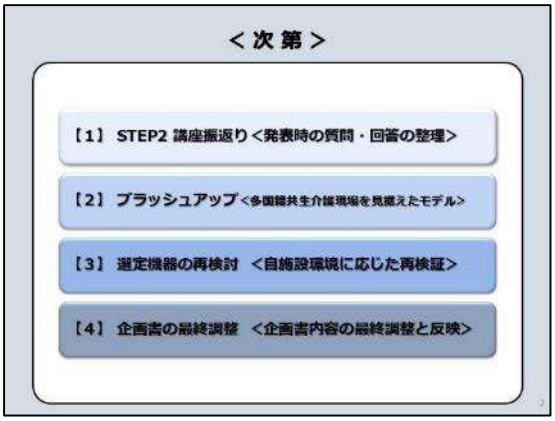
○ 第 3 段階となるグループ学習用ＰＢＬ教材「PBL③」の内容構成

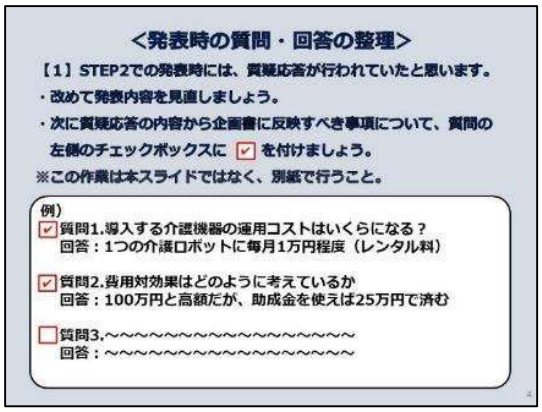
PBL の第 3 段階である「PBL③」に対応する PBL 教材を新規開発した。本教材では、受講者が PBL②で学んだ内容や得られた知見を自施設に持ち帰り、自施設の状況に合わせて AI ツールの導入計画を見直し、より具体的な内容に整理できるようにした。あわせて、必要に応じて小規模な試行を行い、その効果や課題を振り返りながら改善点を明確にする流れを設定している。さらに、取組結果を第 1 段階の施設内受講者同士で共有することで、新たな気づきや他施設の工夫を学べる構成とした。「PBL③」を多国籍共生介護現場に合った AI 活用を自ら判断し実践できる力を高めることを目的とし、令和 7 年度の実証講座における中核教材として位置づけている。

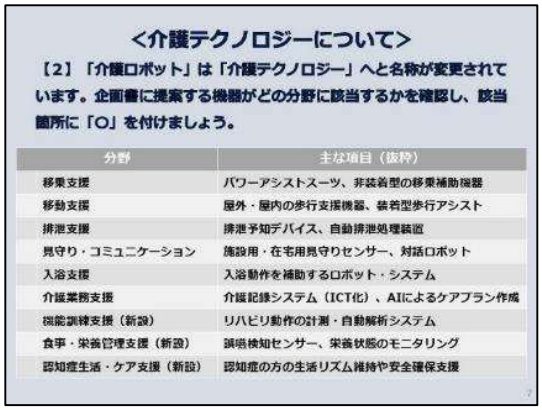
第 3 段階の PBL 教材は PPT の体裁で全体 30 ページの 5 段階構成となっている。

学習内容	アウトプット	時間配分
第 3 段階 企画書改訂	・ オリエンテーション	0.5 時間
	・ STEP2 講座振返り＜発表時の質問・回答の整理＞	1.5 時間
	・ ブラッシュアップ＜多国籍共生介護現場を見据えたモデル＞	3 時間
	・ 選定機器の再検討＜自施設環境に応じた再検証＞	3 時間
	・ 企画書の最終整理＜企画書内容の最終調整と反映＞	2 時間
合　計		10 時間









○前提知識を学習する知識教材の内容構成

ＰＢＬ学習の前提知識を学習する個人学習用 e ラーニング教材については、昨年度の教材や資料を参考して、以下の科目で資料・ワーク・映像の開発を行った。

総ページ数：162 ページ

第 1 章：多国籍共生介護現場の理解と AI

第 2 章：AI による共生型介護支援の基礎
第 3 章：共生介護現場における AI 運用の安全性と効率化
第 4 章：AI 活用の共生介護現場でのトラブル対応とリスク管理
第 5 章：共生介護現場として施設に応じた AI 導入モデル





●実証に関する取組
◎実証講座
本年度は、これまでに開発した教材群 PBL 教材（PBL①・②・③）および e ラーニング教材（基礎 5 科目）を活用し、リカレント教育プログラムの実証講座を実施した。
令和 5 年度には、事業開始段階として、介護現場の経営者およびマネージャー並びにその候補者を対象に、PBL 教材（PBL①）を使用した計 3 時間程度のプレ実証講座を実施した。ここでは教材の初期的な有効性および受講者の反応を把握する予備的検証を行った。
令和 6 年度には、前年度の知見を踏まえ、受講者数拡大を目指し、 3 拠点（関東・関西・九州）において同様の内容の実証講座を、PBL 教材（PBL①・②）を使用して展開し、教材の地域性・多様性への対応力や運用方法について検証した。
令和 7 年度においては、これら一連の実施実績より、教育内容をさらに充実させたうえで、PBL①の「AI 導入計画立案フェーズ」、PBL②の「発表・フィードバック分析フェーズ」に加え、可能な範囲で PBL③の「現場導入・効果検証フェーズ」についても取り入れ、より実践的・応用的な内容で実施した。
また、e ラーニング教材に関しては、事前学習として講座開始前に受講者が履修を完了することを前提とし、集合型学習（PBL）との有機的な連携を図った。加えて、実証講座では、生成 AI などのツールの体験・操作時間を設け、受講者が自身の施設における導入イメージを具体化できるよう支援する内容とした。

なお、本実証講座の実施計画や内容の詳細については、事業計画書１７ページに記載している。講座終了後には、受講者アンケート、知識定着度テスト、施設からの第三者評価等を通じて効果検証を実施した。
実証講座後のアンケート結果から、受講者全員が講座内容を理解し、AI・ICT 活用に関する知識が深まったことが確認された。講座内容の理解度、AI 機器に関する知識の深化、グループワークの達成度はいずれも肯定的な回答が 100%であり、受講者が AI・ICT を介護現場で活用し得る具体的な選択肢として捉える段階に到達していることがうかがえる。また、講座満足度も高く、AI の活用方法や企画書作成を通じて、業務改善の視点や読み手を意識した伝達力の向上が実感されている。さらに、グループワークを通じて課題を検討し意見を共有する経験により、現場課題に応じた AI・ICT 導入を検討する実践的な思考やマネジメント視点が形成されつつあることが確認された。総じて、本実証講座は受講者の業務理解の深化と AI・ICT 活用に対する意識向上に有効であり、活用に向けた共通認識の形成に寄与したと評価できる。

●事業推進に関する取組
◎会議
本事業では、事業全体の方針・計画決定を行い、進捗の管理や実施内容の評価、全体への報告を実施する「実施委員会」と、調査・開発・実証に関して、詳細な仕様決定や検証を行う「分科会」を設置して事業を推進した。令和７年度はそれぞれ３回の会議を開催した。なお、全国各地の機関から多様な委員が参画していることを考慮し、会議の開催形式については対面・オンラインいずれも選択可能とし、基本的にはハイブリッド形式（対面とオンラインの併用）にて実施した。この対応により、物理的な距離やスケジュールの制約に左右されることなく、全委員の積極的かつ継続的な参画を可能にする体制を整えた。

iii. 実施した実証講座の概要

実証講座の対象者	【ＳＴＥＰ１】 介護現場の経営者およびマネージャーと職員
期間	①良創夢デイサービスセンター松川：対面会議で実施 令和 7 年 11 月 13 日（木）17:30～19:30 令和 7 年 12 月 11 日（木）17:30～19:30 ②医療法人葵会ごきげんリハビリクリニック：対面会議で実施 令和 7 年 11 月 14 日（金）17:30～19:30 令和 7 年 12 月 12 日（金）17:30～19:30
実施手法	開発した PBL①教材や個人学習用 e ラーニング教材を用いて、リカレント教育プログラムの全体体系から実証講座向けに教育要素を抽出・再構成して、プログラムの一部を運営した。 実施内容は、多国籍共生介護現場における介護マネジメントへの AI ツールの導入検討を題材とした PBL 学習を中心とした。PBL 学習はグループワークを前提として、集合学習とオンラインで講師が講義する手法を取った。また PBL 学習で必要となる知識（AI 技術の概要、導入事例、導入計画の作成方法など）は e ラーニングで個人学習した。

実証結果

① 実証講座 良創夢デイサービスセンター松川

実施日時	令和 7 年 11 月 13 日（木）17:30～19:30 令和 7 年 12 月 11 日（木）17:30～19:30
主催法人	学校法人彩寿学園
実施会場	良創夢デイサービスセンター松川
出席人数	5 名
講師氏名	竹内豪、齋藤桂三理事長、篠塚良子校長、事務局 1 名
使用教材	「多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得のための研修プログラム開発事業」PBL 教材
実施スケジュール	第 1 回集合講座 令和 7 年 11 月 13 日（木）17:30～19:30 【1】オリエンテーション・講義（10 分） 【2】使用できそうな AI 先端機器を資料で確認し共有（20 分） 【3】課題抽出・選出（30 分） 【4】解決策の考案（20 分） 【5】企画書作成（35 分） 【6】講評・確認テスト・アンケート（5 分） 第 2 回集合講座 令和 7 年 12 月 11 日（木）17:30～19:30 【1】前回までのおさらいと今回の目標を設定（15 分） 【2】前回作成した項目、内容を企画書に反映（20 分） 【3】企画書のクオリティを上げる方法を議論（10 分） 【4】ChatGPT を使用して企画書をブラッシュアップ（45 分） 【5】グループ代表者より企画書の発表（10 分） 【6】講評・e ラーニング確認テスト・アンケート（20 分）
評価	本実証講座の実施後、受講者に対して講座の感想と学習内容への理解に関して確認テストを含んだアンケートを行った。

実証講座の様子

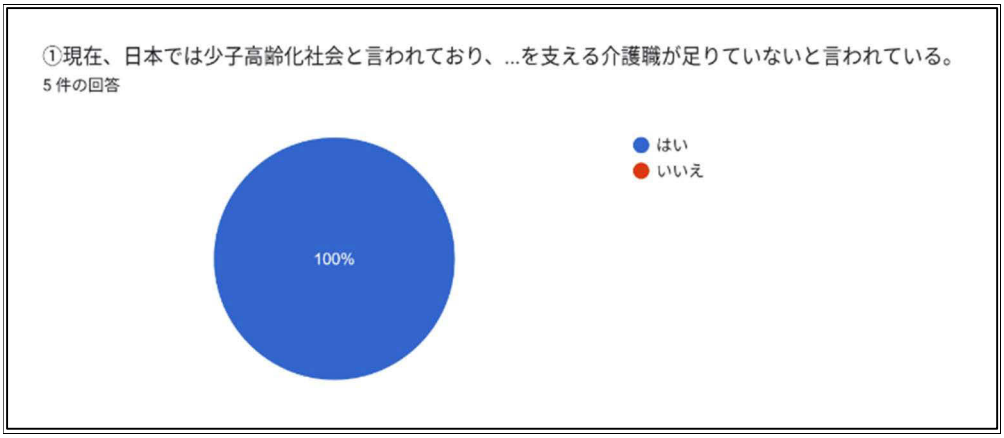




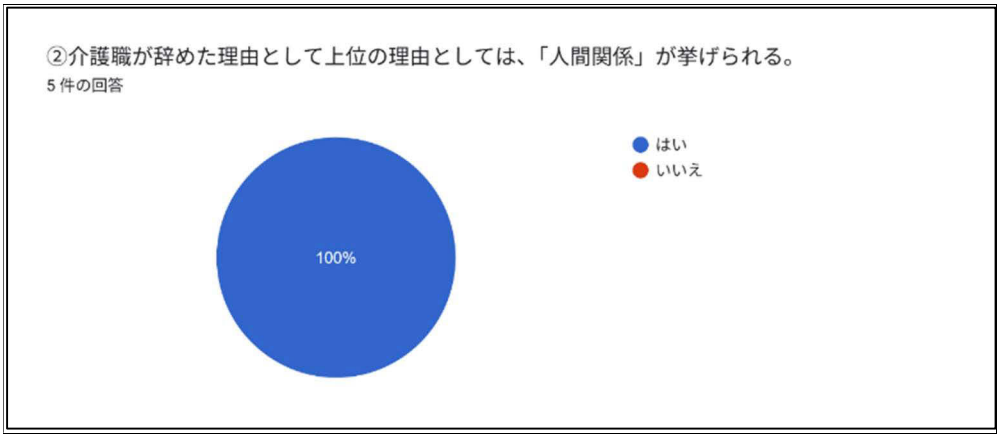
■ 第 1 回実証講座受講者 (計 5 名)／確認テスト・アンケート回答（計 5 名）

【11/13 第 1 回実証講座実施後確認テスト】
この確認テストは、なぜ現在の介護現場のマネージャーに AI・ICT 活用の視点が求められるのかを、受講者自身が論理的に理解することを目的とするものである。
単なる知識の有無を測定するものではなく、社会背景の理解、現場課題の構造的把握、人材マネジメントの視点を踏まえ、AI・ICT を解決手段の 1 つとして主体的に検討する思考の形成を段階的に確認する構成としている。

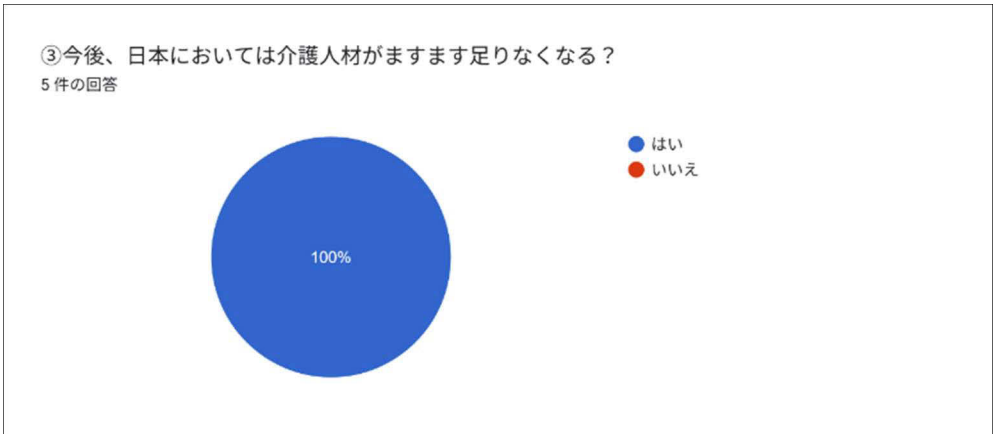
1. 現在、日本では少子高齢化社会と言われており、高齢者を支える介護職が足りていないと言われている。



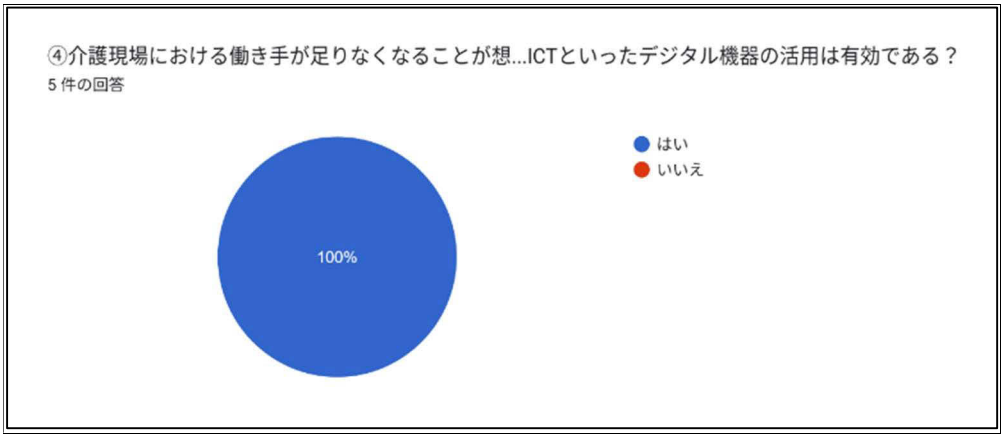
2. 介護職が辞めた理由として上位の理由としては、「人間関係」が挙げられる。



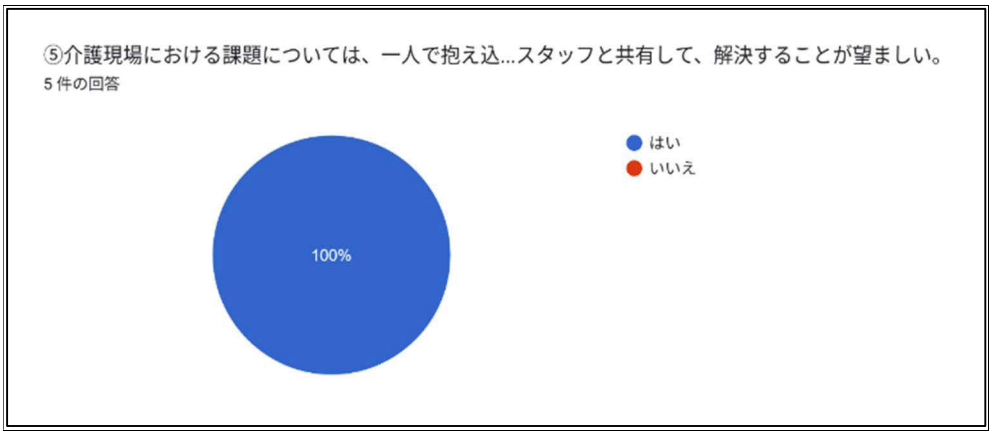
3. 今後、日本においては介護人材がますます足りなくなる？



4. 介護現場における働き手が足りなくなることが想定された場合、ツールの１つとして、ロボットや ICT といったデジタル機器の活用は有効である？



5. 介護現場における働き手が足りなくなることが想定された場合、ツールの１つとして、ロボットや ICT といったデジタル機器の活用は有効である？



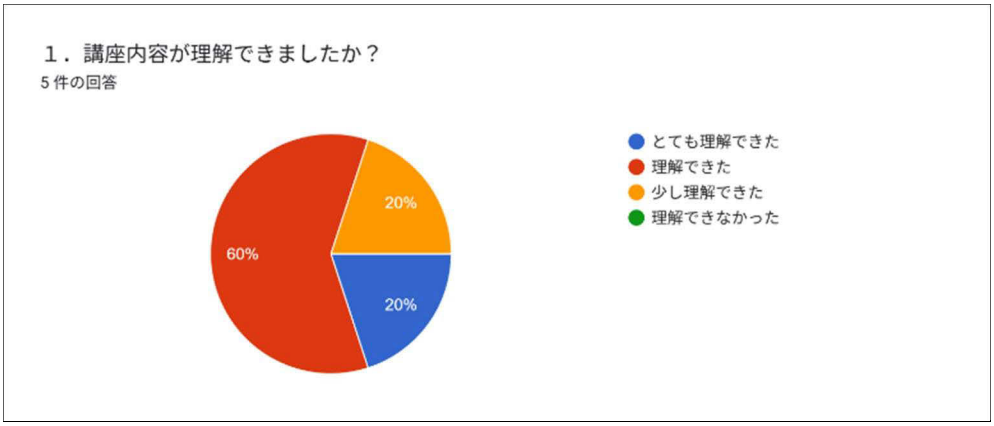
確認テストの結果から、受講者全員が少子高齢化の進行に伴う多国籍共生介護現場における人材不足を個別施設の課題ではなく社会構造上の課題として理解していることが確認できた。また、人材不足の背景には人間関係や職場環境といった要因が大きく影響していることを認識しており、マネジメントの役割として働きやすい職場づくりや離職防止の重要性を重視していることがうかがえる。さらに、こうした課題に対する対応策の一つとして、AI・ICT を人の代替ではなく、現場の負担軽減や業務の効率化、円滑なコミュニケーションを支援するための手段として捉え、状況や課題に応じて合理的に判断できる基礎的なマネジメント認識を身につけていることが分かる。

【11/13 第 1 回実証講座実施後アンケート】

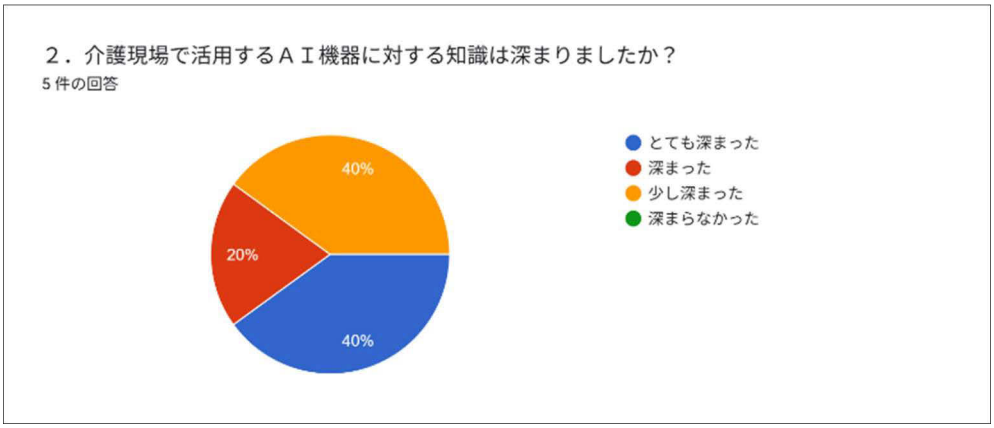
このアンケートは、多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得研修において、受講者が「理解したか」「知識が増えたか」にとどまらず、現場で活用する視点を獲得できたかを段階的に確認することを目的としている。

特に、AI・介護機器を単なる技術として捉えるのではなく、現場課題の解決や人材マネジメントに資する選択肢として判断できる状態に近づいているかを把握する意図がある。

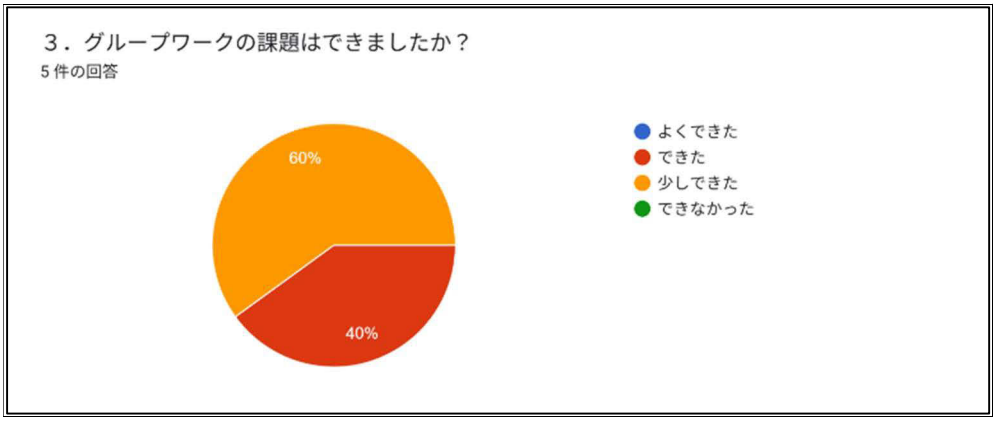
1. 講座内容が理解できましたか？



2. 介護現場で活用するＡＩ機器に対する知識は深まりましたか？



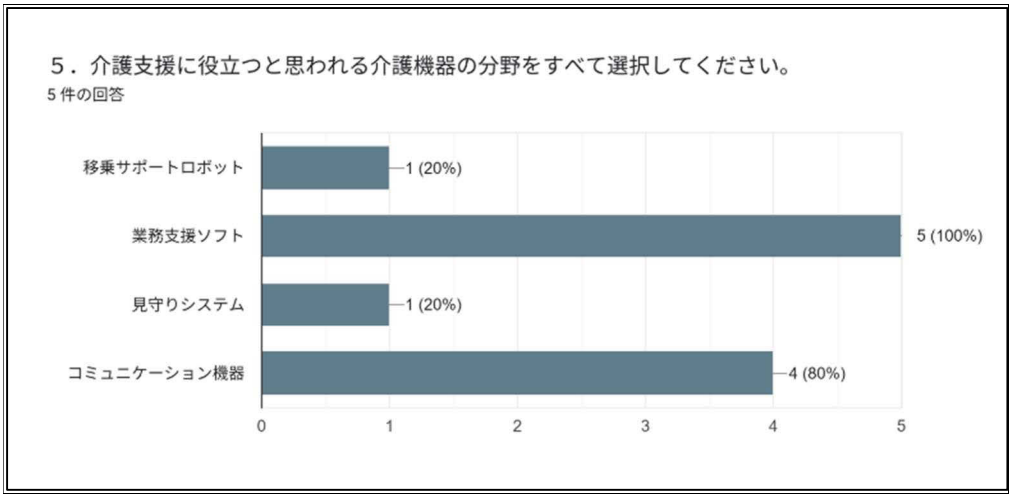
3. グループワークの課題はできましたか？



4. 本日の講座内容で関心を持ったことがあればご自由にお書きください。

・いろいろなシステムがあり実際に使用したいと思う
・介護 AI に対する知識が深まりました。さまざまな AI 機器がこんなにあることに驚いています。
・チャット GPT の活用

5. 介護支援に役立つと思われる介護機器の分野をすべて選択してください。



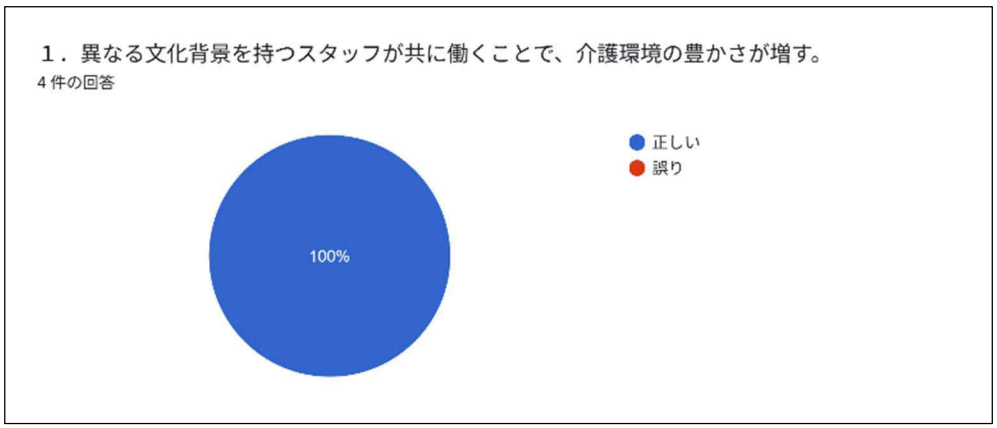
アンケート結果から、受講者の多くが講座内容を理解し、AI・ICT 活用に対する基礎的な認識を持つことができたと考えられる。講座内容の理解度や AI 機器に関する設問では肯定的な回答が多く、AI・ICT を介護現場で活用し得る選択肢として捉える意識が高まったことがうかがえる。また、グループワークを通じて課題を考え、意見を共有する

経験により現場を意識した実践的な思考への一歩を踏み出した受講者も多かった。総じて、本講座を通じて AI・ICT 活用の必要性について一定の共通認識が形成されたと評価できる。

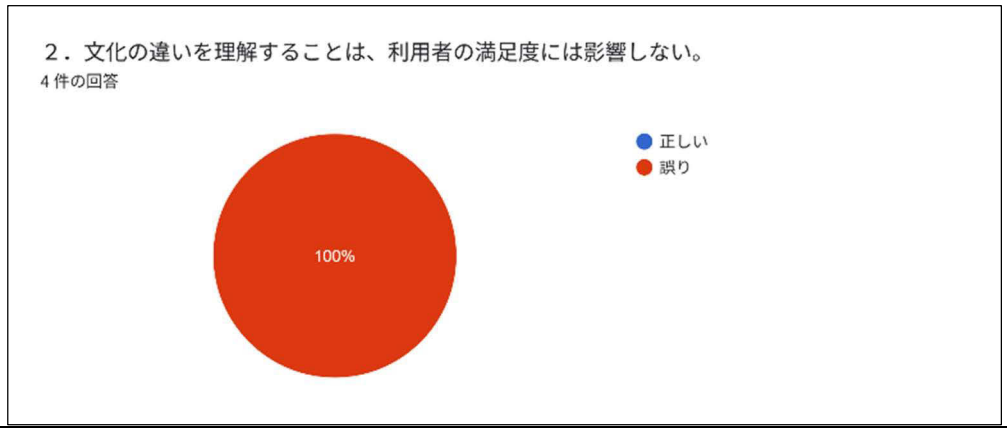
■ 第 2 回実証講座受講者 (計 4 名)／アンケート回答（計 4 名）

【12/11 第 2 回実証講座実施後確認テスト】
この確認テストは、多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得のための研修プログラム開発事業の一環として実施したものである。少子高齢化に伴う介護人材不足を社会構造上の課題として理解し、その背景にある人間関係や職場環境の改善が重要であるとの認識が身についているかを確認することを目的とした。

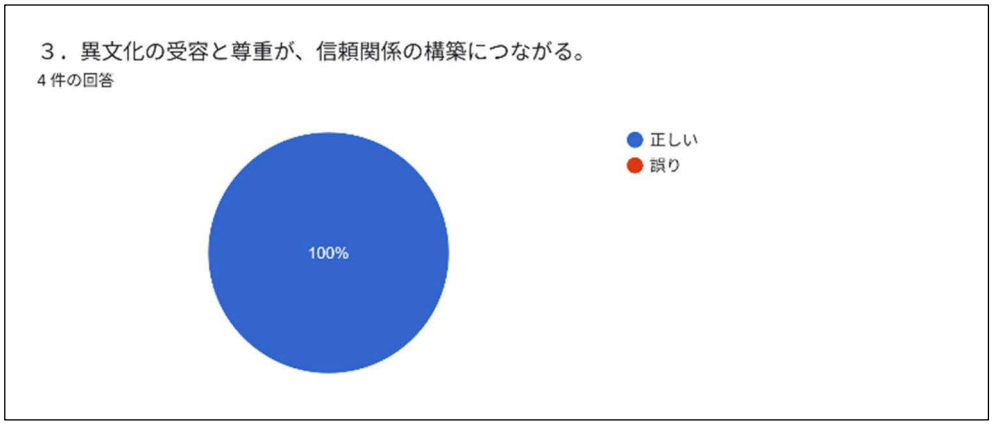
1. 異なる文化背景を持つスタッフが共に働くことで、介護環境の豊かさが増す。



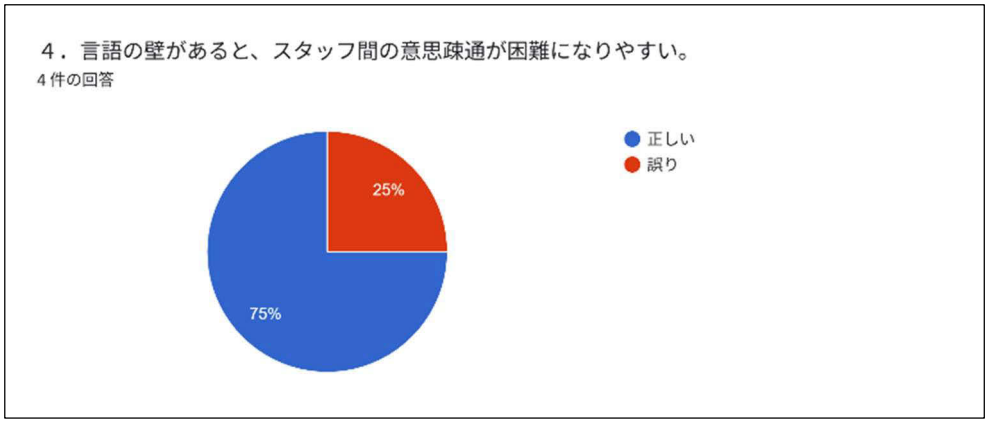
2. 文化の違いを理解することは、利用者の満足度には影響しない。



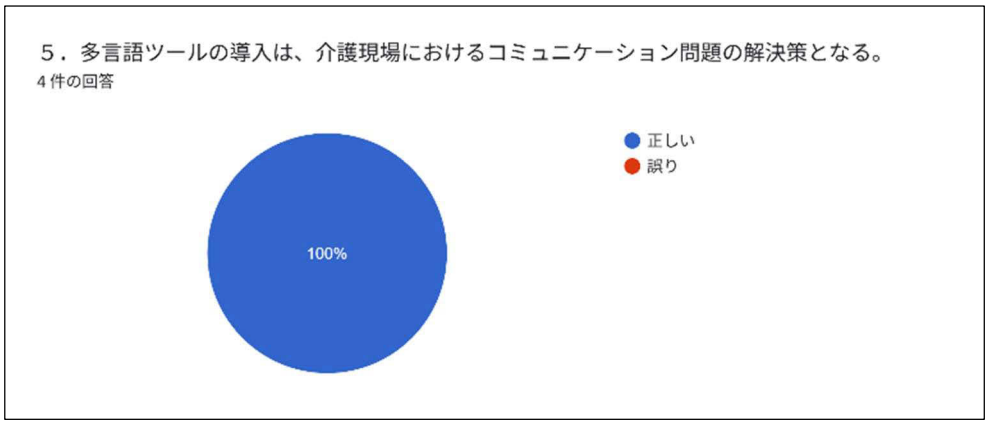
3. 異文化の受容と尊重が、信頼関係の構築につながる。



4. 言語の壁があると、スタッフ間の意思疎通が困難になりやすい。



5. 多言語ツールの導入は、介護現場におけるコミュニケーション問題の解決策となる。



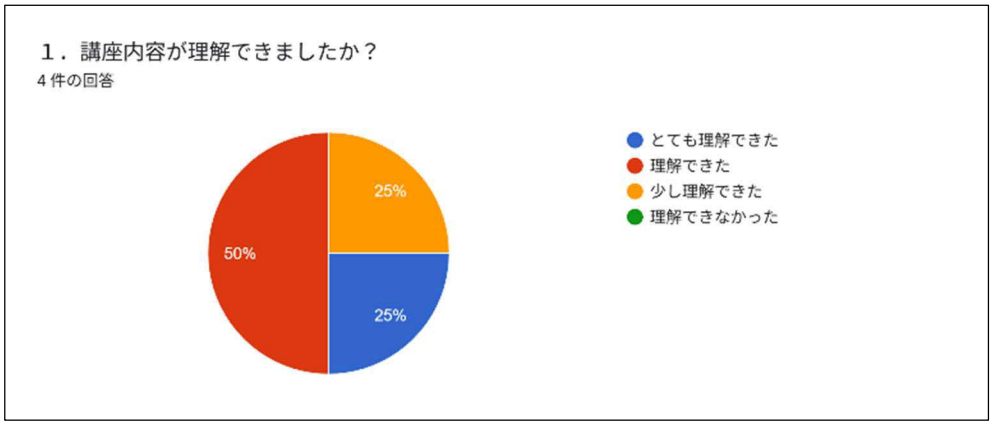
確認テストの結果から、受講者は、多国籍共生介護現場における文化的多様性の意義を理解し、異文化の受容や尊重が職員間の信頼関係の構築や利用者満足度の向上につながることを共通認識として有していることが確認できた。また、言語の壁がコミュニケーション上の課題

となり得る点について概ね理解が見られ、多言語ツールや AI・ICT を課題解決の一手段として前向きに捉えている。これにより、受講者は AI・ICT 導入を検討・判断するための基礎的なマネジメント認識を身につけていると評価できる。

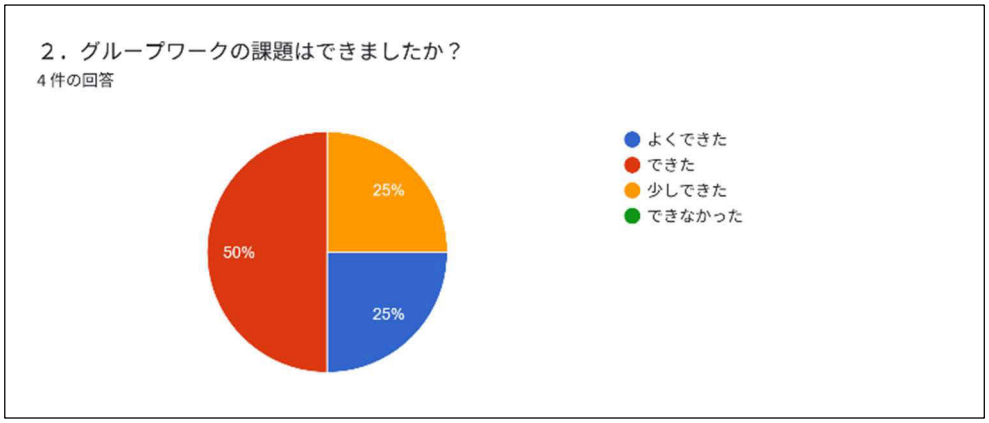
【12/11　第 2 回実証講座実施後アンケート】

このアンケートは、多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI・ICT 導入研修において、受講者が講座内容を理解し、AI・ICT 活用の必要性を認識できたかを確認することを目的として作成されたものである。あわせて、AI 機器に関する知識の深化や、グループワークを通じた実践的な思考への移行、AI・ICT を現場改善の選択肢として主体的に検討できる段階に到達しているかを把握するものである。

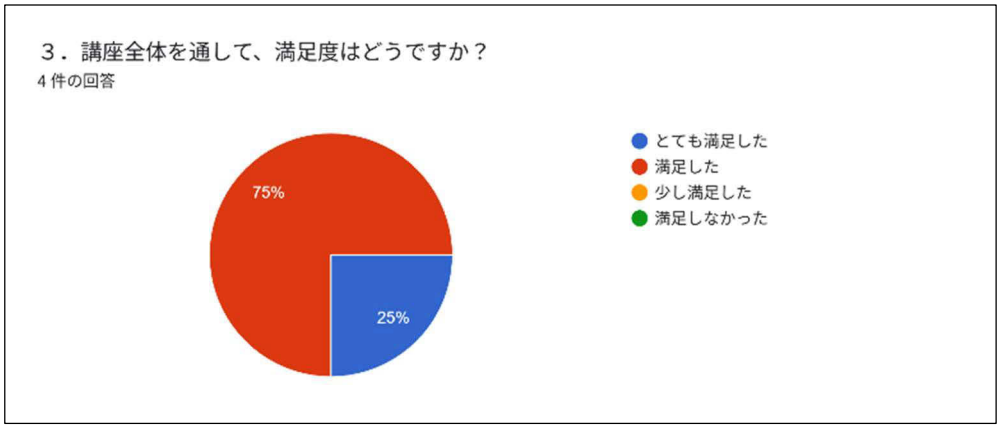
1. 講座内容が理解できましたか？



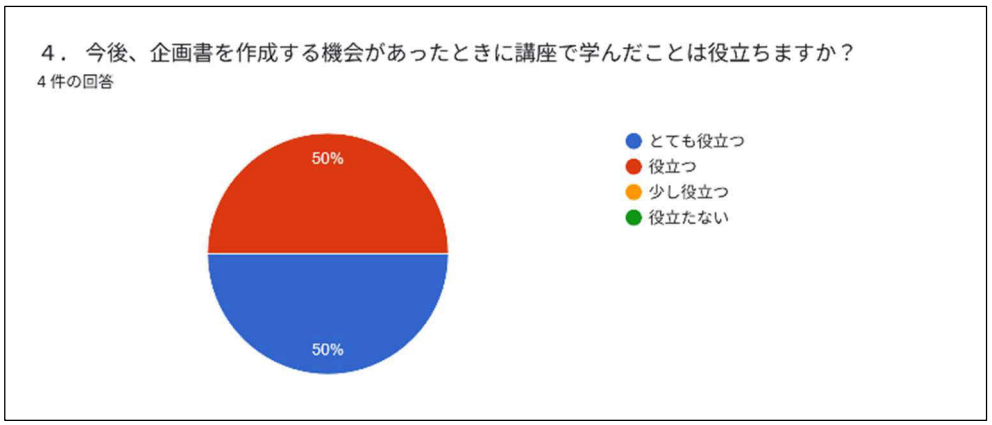
2. グループワークの課題はできましたか？



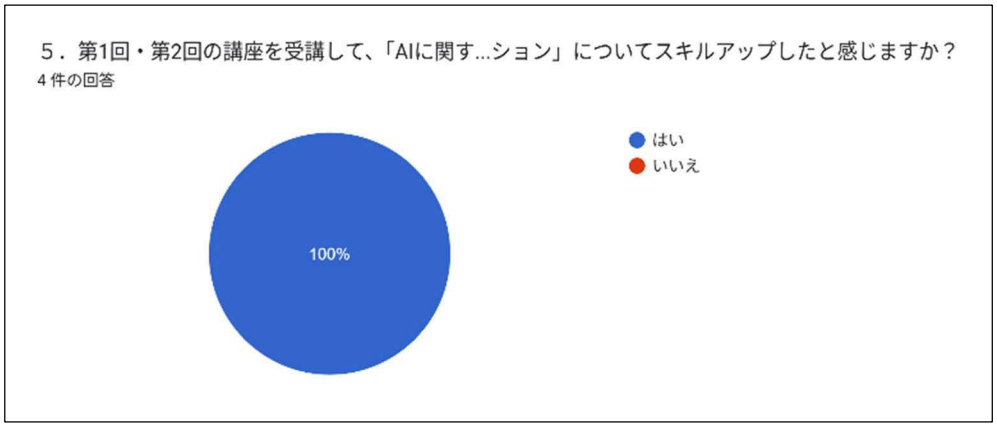
3. 講座全体を通して、満足度はどうですか？



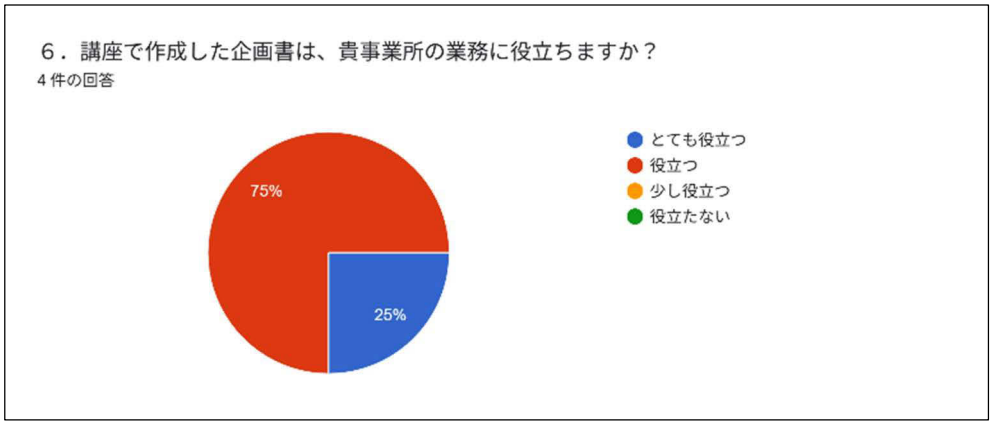
4. 今後、企画書を作成する機会があったときに講座で学んだことは役立ちますか？



5. 第 1 回・第 2 回の講座を受講して、「AI に関する知識」や「コミュニケーション」についてスキルアップしたと感じますか？



6. 講座で作成した企画書は、貴事業所の業務に役立ちますか？



7. 本日の講座内容で関心を持ったことがあればご自由にお書きください。

・安全運転の特徴

・たくさんのシステムがありいろいろ勉強になりました。

アンケート結果から、設問 4 において、「とても役立つ」と「役立つ」がそれぞれ 50%を占めており、受講者全員が講座内容を実務に活かせると評価していることが分かる。さらに、設問 6 についても、「とても役立つ」が 25%、「役立つ」が 75%と、すべて肯定的な回答となっている。これらの結果から、本講座は企画書作成に必要な知識や考え方を実践的に学べる内容であり、AI を活用して多国籍共生介護現場の環境を整備するマネージャーとして必要な知識やスキルを、受講者が適切に習得できたと考えられる。

■ 企画書の指導提案

「目的」の表現がやや固いため、やわらかい言い回しにすることで、読み手が内容を直感的に理解しやすくなる。「現状と課題」では、送迎計画作成や職員の送迎対応、延着・早着対応に要している時間や負担を具体的な数字で示すことで、説得力が高まる。また、「AI 導入による効果」にも具体的な数字を加えると、経営陣が効果を判断しやすくなる。あわせて、AI を導入しない場合に生じ得るリスクを示すことで、導入の必要性をより明確にできる。

■ 総評

2 日間にわたる実証講座では、介護現場のスタッフや管理者が参加し、施設・事業所における課題の抽出を行った。その結果、「人員不足・業務量過多」「事務・記録業務の負担」「利用者対応・ケアの質・コミュニケーション」の 3 点が主な課題として挙げられ、中でも「人員不足・業務量過多」が最も重要な課題として認識されていた。本講座ではこの課題に対し、AI 機器による解決策を検討するため、機器の調査と選定、企画書作成、発表までを一連の流れとして実施した。その結果、送迎業務の効率化に資する AI 機器として「DRIVE BOSS（パナソニック カーエレクトロニクス株式会社)」が最適と判断され、導入するための企画書が作成された。現場では人手不足により介助や送迎業務が逼迫しており、特に送迎計画作成の負担が大きいことから、業務効率化への関心が高いことがうかがえる。また、全受講者が AI 知識やコミュニケーション面でのスキルアップを実感しており、本講座は実践的な学びの機会となったと評価できる。

② 実証講座 医療法人葵会ごきげんリハビリクリニック

実施日時	令和 7 年 11 月 14 日（金）17:30～19:30 令和 7 年 12 月 12 日（金）17:30～19:30
主催法人	学校法人彩寿学園
実施会場	医療法人葵会ごきげんリハビリクリニック
出席人数	5 名
講師氏名	竹内豪、齋藤桂三理事長、篠塚良子校長、事務局 1 名
使用教材	「多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得のための研修プログラム開発事業」PBL 教材
実施スケジュール	第 1 回集合講座 令和 7 年 11 月 14 日（金）17:30～19:30 【1】オリエンテーション・講義（10 分） 【2】使用できそうな AI 先端機器を資料で確認し

	共有（20 分） 【3】課題抽出・選出（30 分） 【4】解決策の考案（20 分） 【5】企画書作成（35 分） 【6】講評・確認テスト・アンケート（5 分） 第 2 回集合講座 令和 7 年 12 月 12 日（金）17:30～19:30 【1】前回までのおさらいと今回の目標を設定（15 分） 【2】ワークシートの商品情報や項目、内容について ChatGPT を使用して修正（35 分） 【3】修正箇所を企画書に反映（40 分） 【4】グループ代表者より企画書の発表（10 分） 【5】講評・e ラーニング確認テスト・アンケート（20 分）
評価	本実証講座の実施後、受講者に対して講座の感想と学習内容への理解に関して確認テストを含んだアンケートを行った。

実証講座の様子

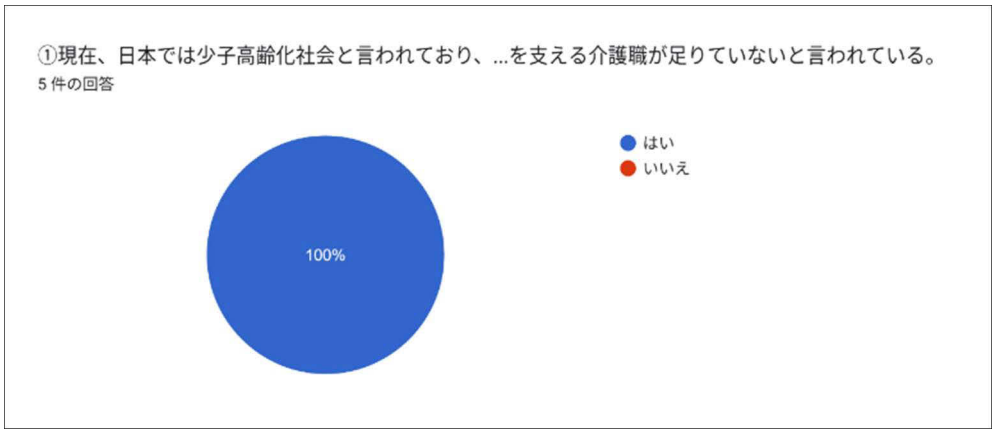




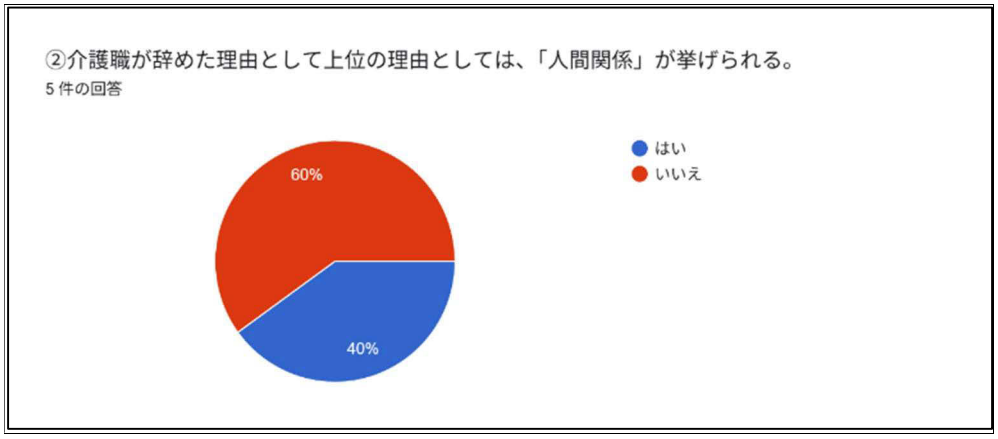
■ 第 1 回実証講座受講者 (計 5 名)／確認テスト・アンケート回答（計 5 名）

【11/14 第 1 回実証講座実施後確認テスト】
この確認テストは、なぜ現在の介護現場のマネージャーに AI・ICT 活用の視点が求められるのかを、受講者自身が論理的に理解することを目的とするものである。
単なる知識の有無を測定するものではなく、社会背景の理解、現場課題の構造的把握、人材マネジメントの視点を踏まえ、AI・ICT を解決手段の 1 つとして主体的に検討する思考の形成を段階的に確認する構成としている。

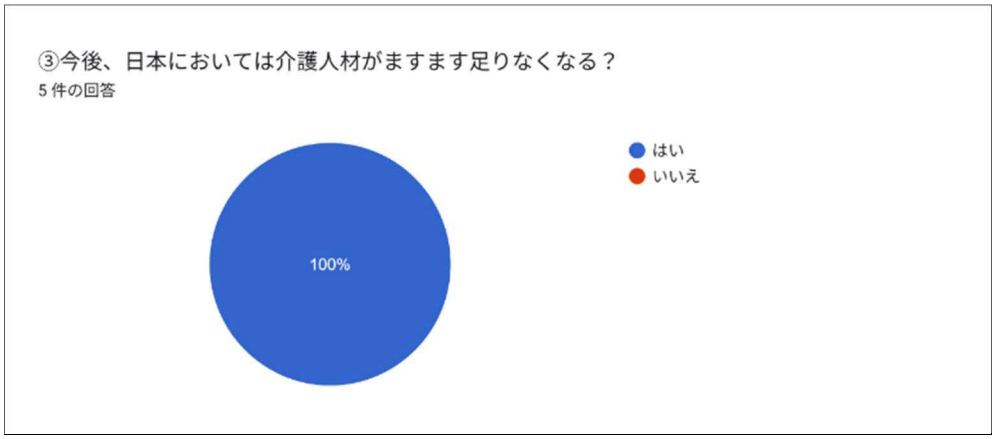
1. 現在、日本では少子高齢化社会と言われており、高齢者を支える介護職が足りていないと言われている。



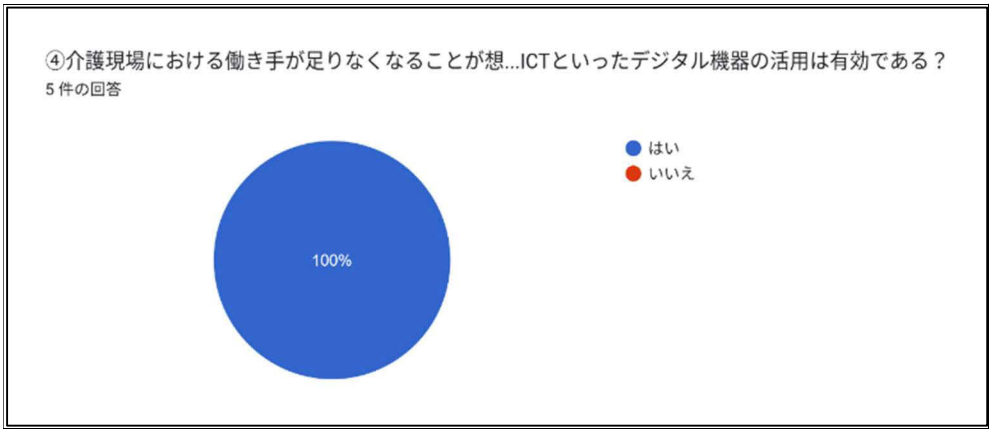
2. 介護職が辞めた理由として上位の理由としては、「人間関係」が挙げられる。



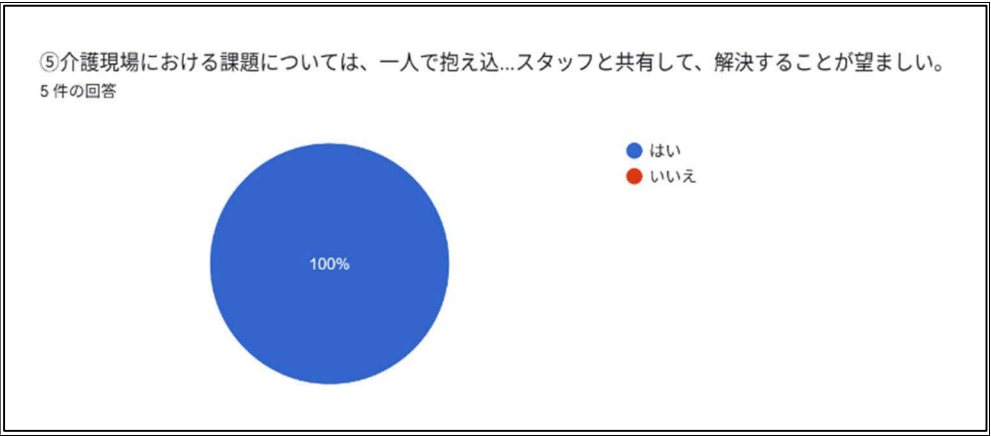
3. 今後、日本においては介護人材がますます足りなくなる？



4. 介護現場における働き手が足りなくなることが想定された場合、ツールの１つとして、ロボットや ICT といったデジタル機器の活用は有効である？



5. 介護現場における働き手が足りなくなることが想定された場合、ツールの１つとして、ロボットや ICT といったデジタル機器の活用は有効である？



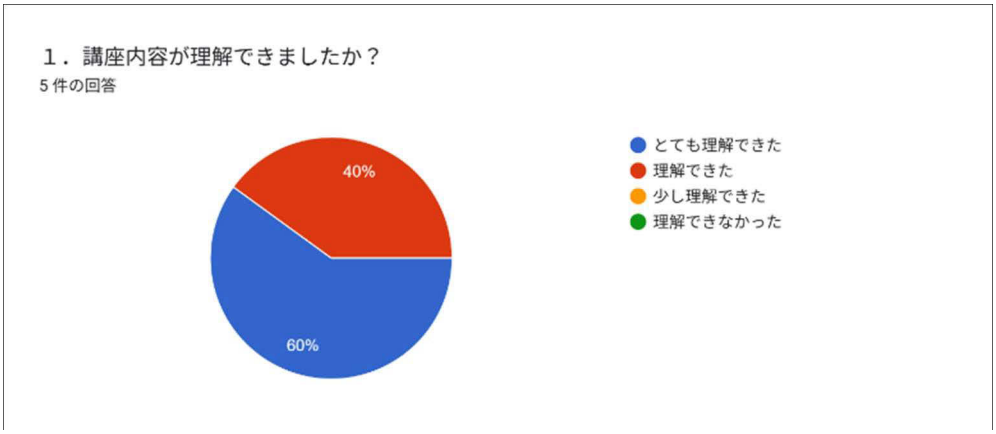
確認テストの結果から、設問 2 の正答率は 60％であった。今回の受講者は、「人間関係」よりも「賃金・待遇への不満」「人手不足による業務量過多」「将来性」といった要因の方が上位であると認識している傾向が見られる。一方で、その他の設問については正答率がすべて 100％であり、全体としては、受講者のほぼ全員が講座内容を正しく理解していることが確認できたといえる。

【11/14 第 1 回実証講座実施後アンケート】

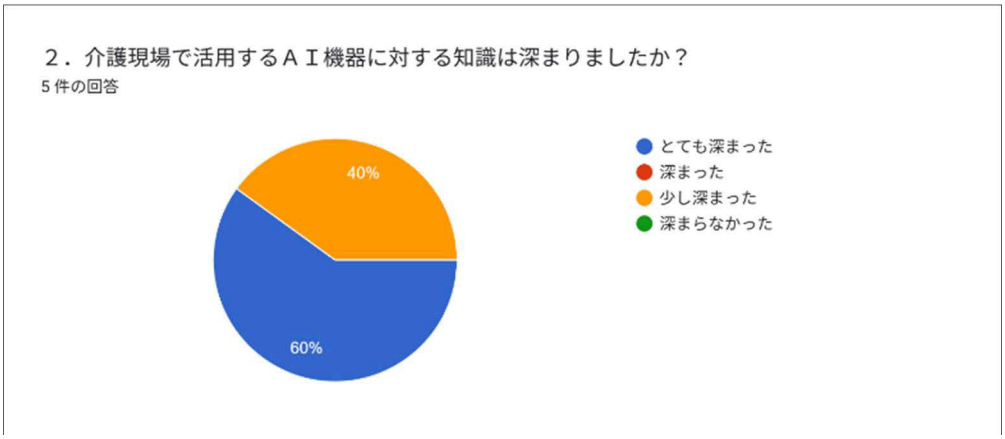
このアンケートは、多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得研修において、受講者が「理解したか」「知識が増えたか」にとどまらず、現場で活用する視点を獲得できたかを段階的に確認することを目的としている。

特に、AI・介護機器を単なる技術として捉えるのではなく、現場課題の解決や人材マネジメントに資する選択肢として判断できる状態に近づいているかを把握する意図がある。

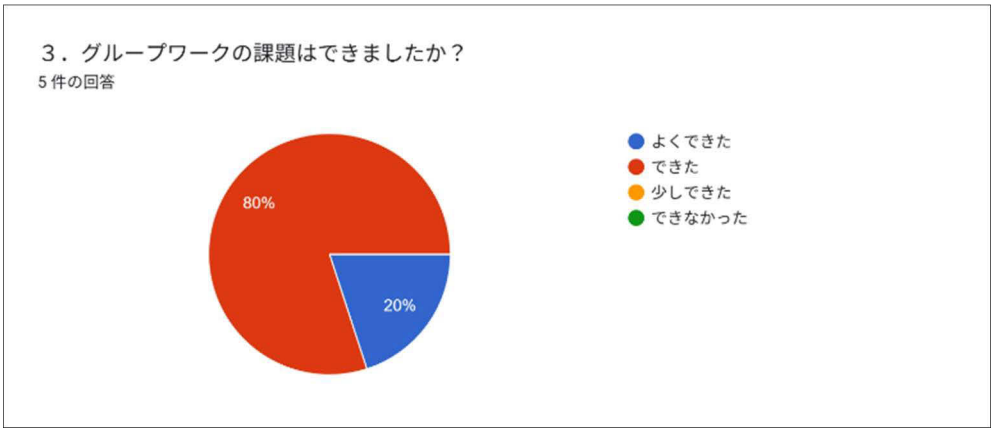
1. 講座内容が理解できましたか？



2. 介護現場で活用するＡＩ機器に対する知識は深まりましたか？



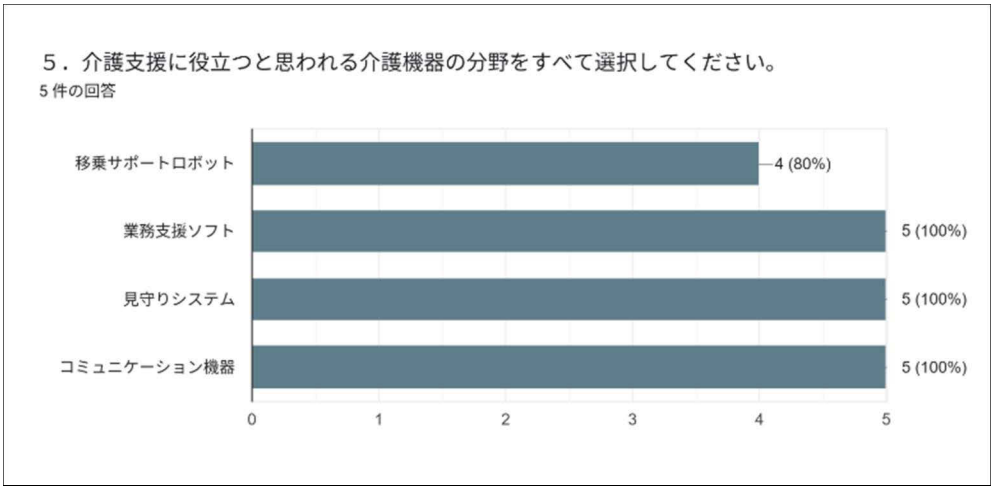
3. グループワークの課題はできましたか？



4. 本日の講座内容で関心を持ったことがあればご自由にお書きください。

・AI との共存で、働きやすい環境作りができると良いと思いました。
・チャット GPT
・AI や ICT についての知識が十分ではなかったので、今回の講座を受けて、現場で活かせそうなものが数多くあることを知れたことがとても良かった。 実際に導入となると費用面や維持費などの兼ね合いが出てくると思いますが、現場で役に立つものであれば導入に検討していきたい。
・他に AI 機器がどのように利用されてるかが気になりました。

5. 介護支援に役立つと思われる介護機器の分野をすべて選択してください。



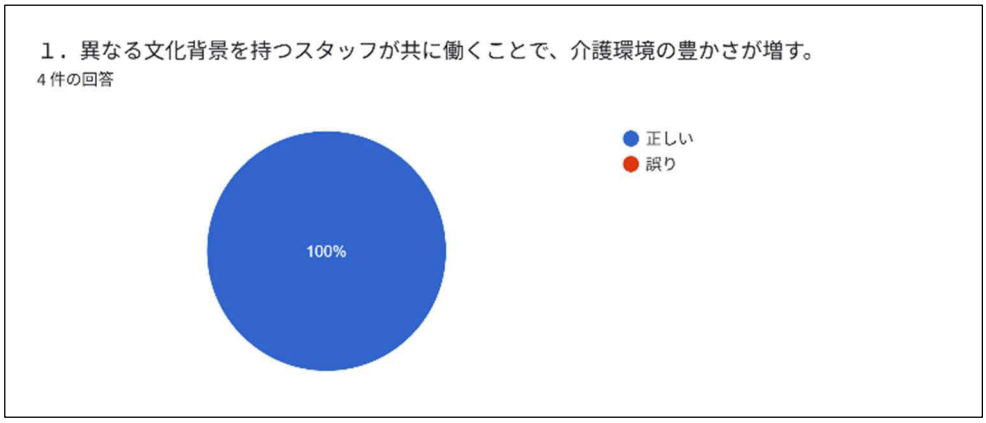
アンケート結果から、受講者全員が講座内容を理解し、AI・ICT 活用

に関する知識が深まったことが確認できる。講座内容の理解度および AI 機器に対する知識の深化、グループワークの達成度はいずれも肯定的な回答が 100％であり、受講者が AI・ICT を介護現場で活用し得る具体的な選択肢として捉える段階に到達していることがうかがえる。また、介護機器の分野選択では、複数分野が高い割合で選択されており、AI・ICT 導入を現場課題に応じて検討するマネジメント視点が形成されつつある。

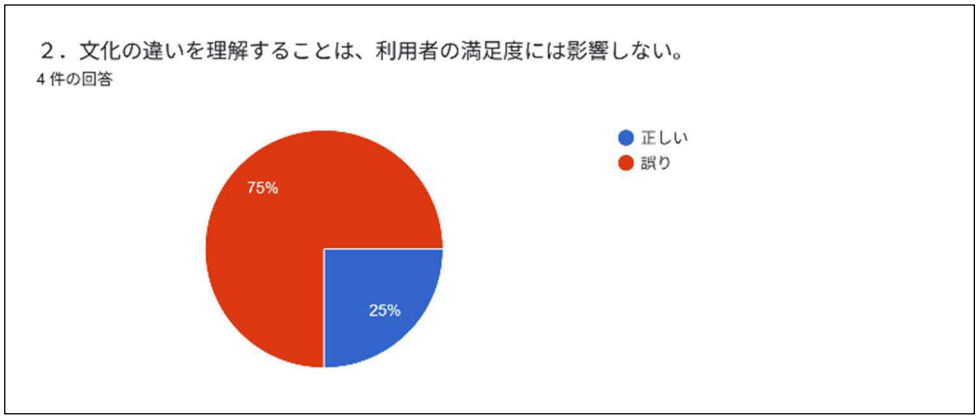
■ 第 2 回実証講座受講者（計 4 名）／アンケート回答（計 4 名）

【12/12 第 2 回実証講座実施後確認テスト】
この確認テストは、多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得のための研修プログラム開発事業の一環として実施したものである。少子高齢化に伴う介護人材不足を社会構造上の課題として理解し、その背景にある人間関係や職場環境の改善が重要であるとの認識が身についているかを確認することを目的とした。

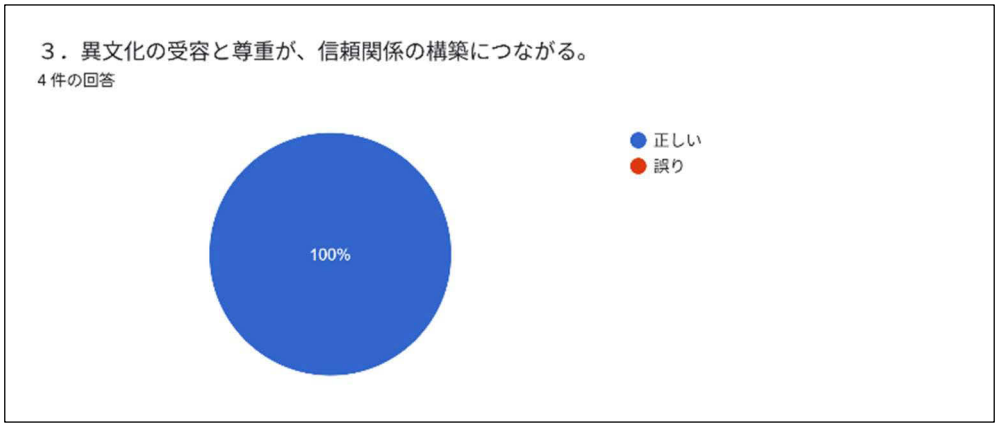
1. 異なる文化背景を持つスタッフが共に働くことで、介護環境の豊かさが増す。



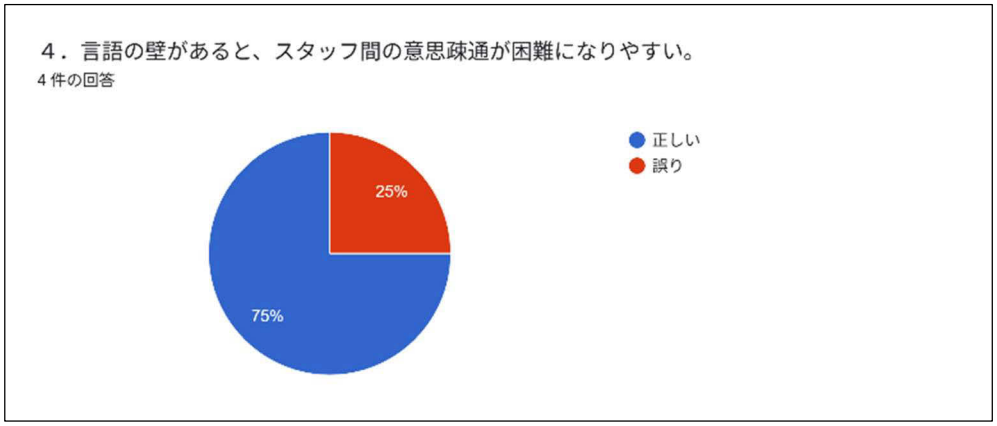
2. 文化の違いを理解することは、利用者の満足度には影響しない。



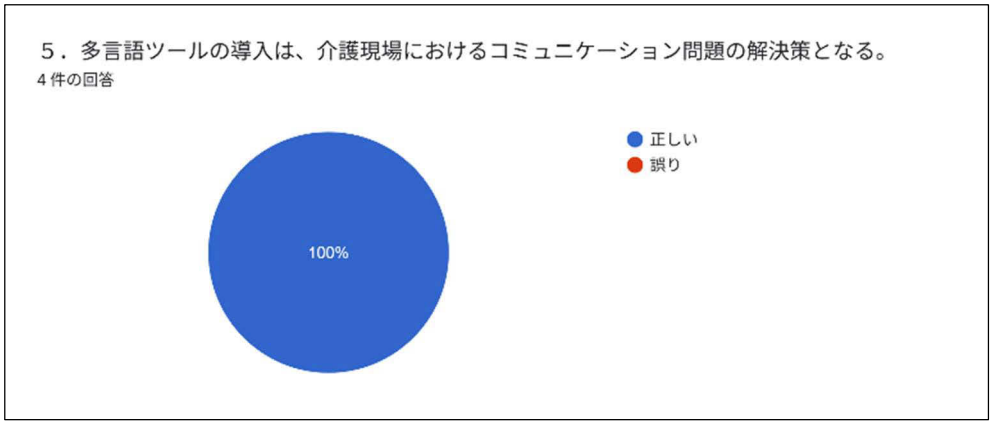
3. 異文化の受容と尊重が、信頼関係の構築につながる。



4. 言語の壁があると、スタッフ間の意思疎通が困難になりやすい。



5. 多言語ツールの導入は、介護現場におけるコミュニケーション問題の解決策となる。

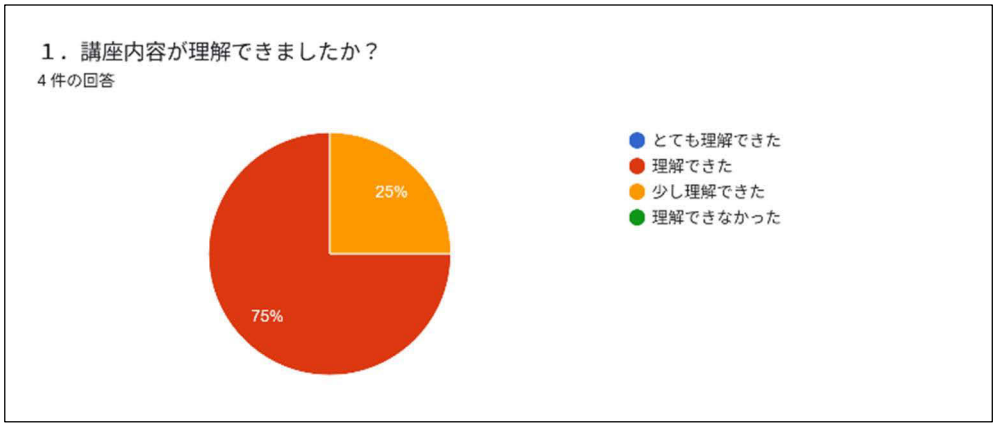


確認テストの結果、設問 2 および設問 4 でそれぞれ 25％の誤答が見られたものの、全体として受講者は多文化共生や異文化理解の重要性について高い理解を示し、講座内容は概ね定着していることが確認できた。特に、異なる文化背景を持つスタッフが共に働くことが介護環境の質向上や信頼関係の構築につながる点については、共通認識が形成されている。一方で、文化理解と利用者満足度、多言語ツールの活用効果に関しては判断に迷う傾向が見られたため、今後は具体的な事例や現場での活用場面を取り入れることで、より実践的な理解の深化が期待される。

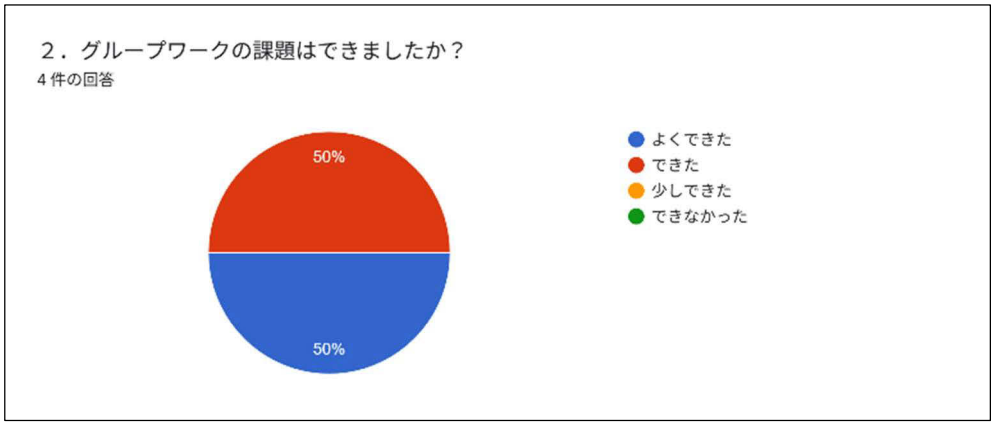
【12/12　第 2 回実証講座実施後アンケート】

このアンケートは、多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI・ICT 導入研修において、受講者が講座内容を理解し、AI・ICT 活用の必要性を認識できたかを確認することを目的として作成されたものである。あわせて、AI 機器に関する知識の深化や、グループワークを通じた実践的な思考への移行、AI・ICT を現場改善の選択肢として主体的に検討できる段階に到達しているかを把握するものである。

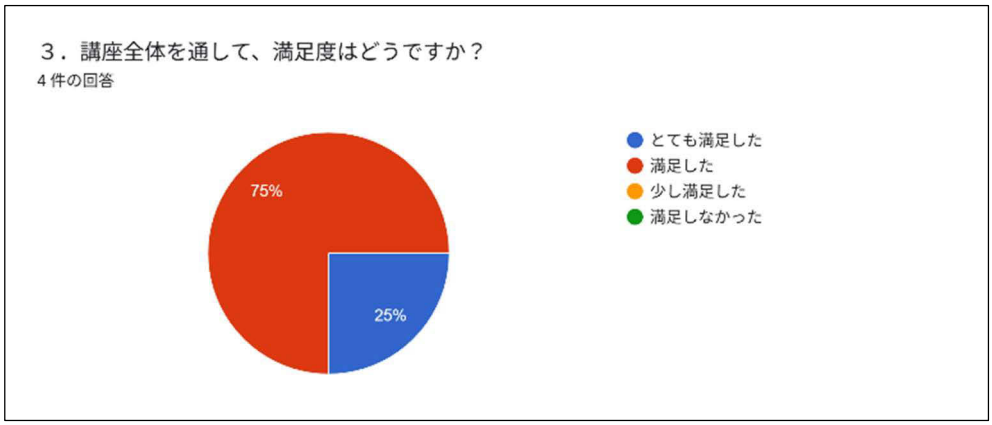
1. 講座内容が理解できましたか？



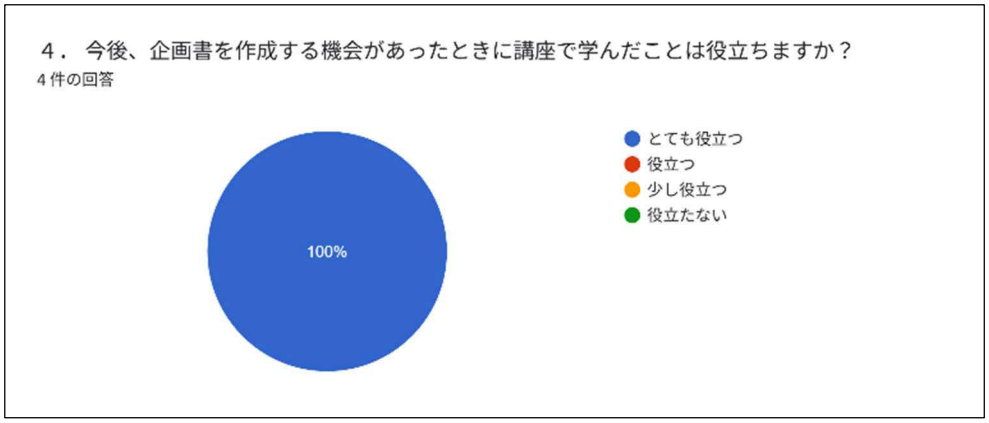
2. グループワークの課題はできましたか？



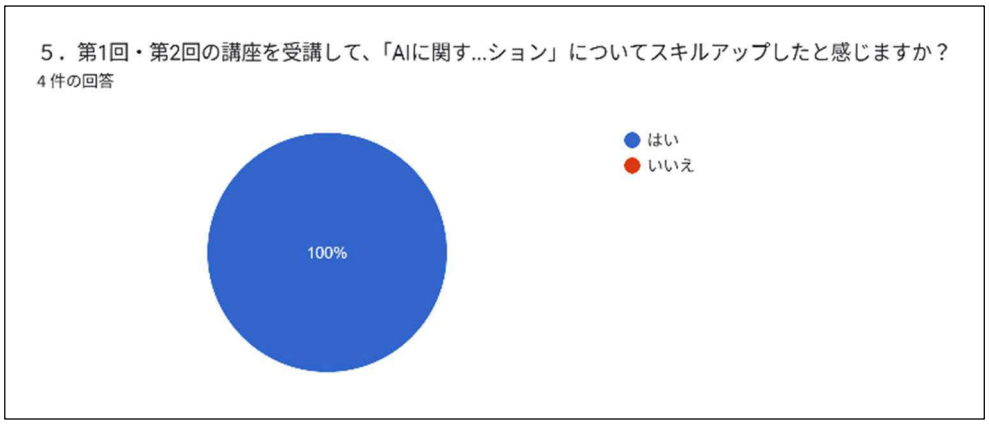
3. 講座全体を通して、満足度はどうですか？



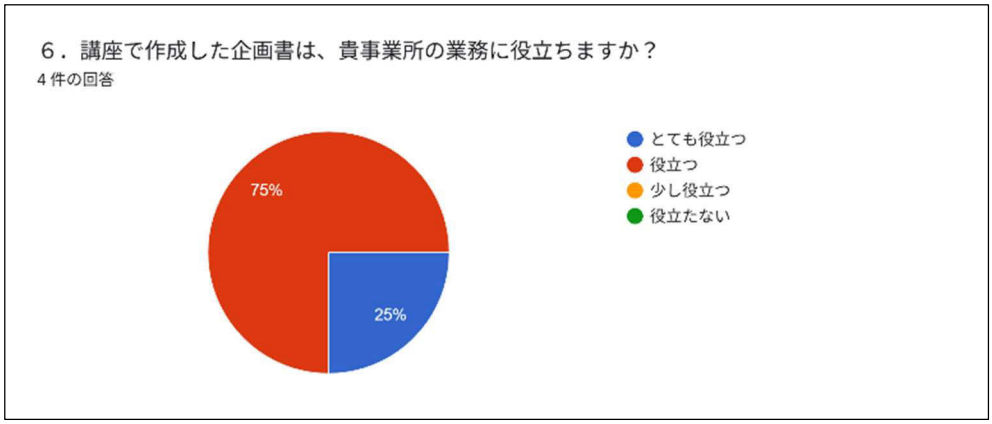
4. 今後、企画書を作成する機会があったときに講座で学んだことは役立ちますか？



5. 第 1 回・第 2 回の講座を受講して、「AI に関する知識」や「コミュニケーション」についてスキルアップしたと感じますか？



6. 講座で作成した企画書は、貴事業所の業務に役立ちますか？



7. 本日の講座内容で関心を持ったことがあればご自由にお書きください。

・チャット GTP を使うことができて、いろいろと便利につかえることを学びました。企画書を作る機会があった時に活かしていきたいです。

・企画書を作成するにあたり、読み手にとってより効果的に伝わるような工夫をたくさん学ぶことができました。

アンケート結果から、講座内容の理解度および満足度はいずれも高く、本実証講座が受講者の業務理解と意識向上に有効であったことが確認できた。特に、AI の活用方法や企画書作成を通じて、読み手を意識した伝え方や業務改善の視点を得られた点について、高い評価が得られている。また、全員が AI に関する知識やコミュニケーションに関するスキルアップを実感しており、実務への応用意欲も高いことが分かる。

■ 企画書の指導提案

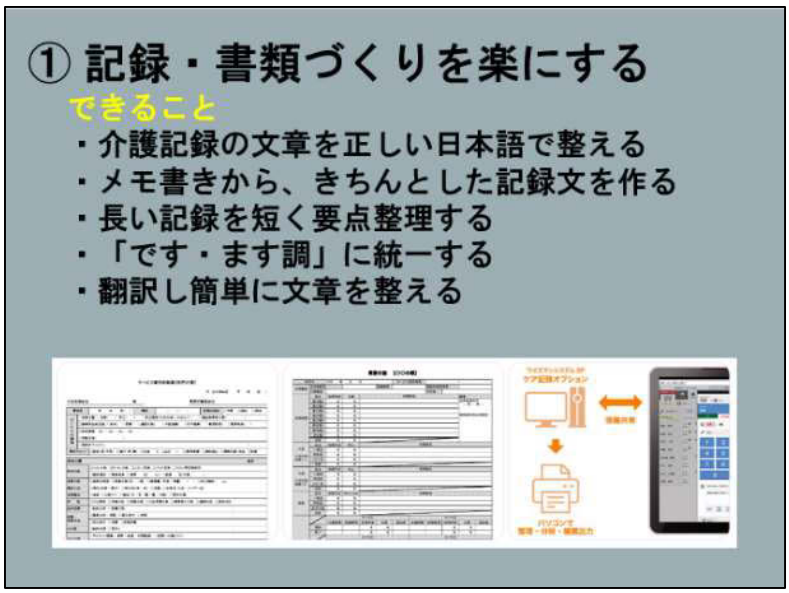
「目次」にキャッチフレーズを加えることで、企画全体の意図が読み手に伝わりやすくなる。「導入の背景と目的」では、なぜ清掃業務が後回しになっているのか、その要因を具体的に示すことで、課題の重要性を明確にできる。「費用」については、単なる金額提示にとどまらず、費用対効果を併せて説明することで、経営者が判断しやすくなる。また、「リスクと対策」では 8 つのリスクが挙げられているが、情報量が多いため、特に重要度の高いリスクを強調して示すことで、より理解しやすくなる。

■ 総評

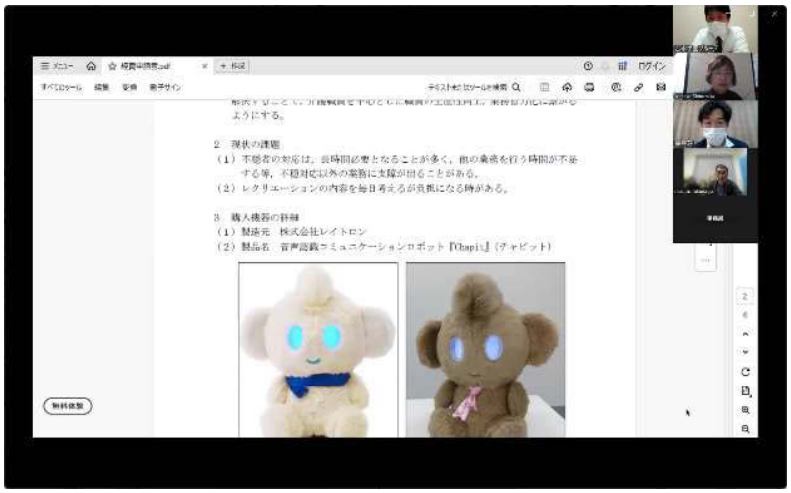
2 日間にわたる実証講座は、多国籍共生介護現場のマネージャーを対象に、AI・ICT を単なる技術として学ぶのではなく、現場課題の解決や人材マネジメントに活用する視点を獲得することを目的として実施した。その結果、確認テストおよびアンケートから、受講者の多くが介護現場を取り巻く社会的背景や人材不足といった課題構造を理解し

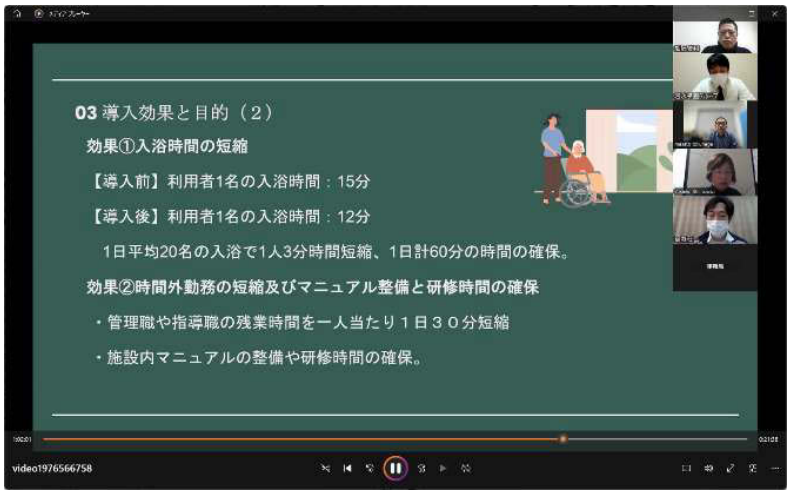
	たうえで、AI・ICT を解決手段の 1 つとして主体的に捉え始めていることが確認できた。特に、PBL 形式による課題抽出や企画書作成を通じて、自施設・自事業所の課題を整理し、読み手を意識して提案内容を構成する実践的な思考力が養われた点は大きな成果である。また、AI や ICT の活用が業務効率化だけでなく、働きやすい職場環境づくりや人材定着につながる可能性についても理解が進み、今後の現場改善に向けた具体的な検討につながる講座となったと評価できる。
受講者数	10 人

<table>
<tr><td>実証講座の対象者</td><td>【ＳＴＥＰ２】
介護現場の経営者およびマネージャー</td></tr>
<tr><td>期間</td><td>令和 8 年 1 月 29 日（木）17:30～19: 30
オンライン講座で実施</td></tr>
<tr><td>実施手法</td><td>開発した PBL②教材を活用し、介護現場の経営者やマネージャーが、PBL①で作成した企画書をもとに、リカレント教育プログラムの全体体系から STEP2 講座に向けた教育要素を抽出・再構成し、プログラムの一部を運営した。
実施内容は、受講者が多国籍共生介護現場における介護マネジメントへの AI ツールの導入検討を題材とした企画書を持ち寄り、自身の導入計画を発表し、相互にフィードバックを受けた。
PBL②教材の活用により、働きながら学ぶ人々が実務に即した知識を習得しやすい環境を提供し、企画書再考やより実践的な問題解決能力の向上を支援することができた。</td></tr>
<tr><td></td><td>ＳＴＥＰ２
<table><tr><td>実施日時</td><td>令和 8 年 1 月 29 日（木）17:30～19: 30</td></tr><tr><td>実施場所</td><td>オンライン講座</td></tr><tr><td>参加施設</td><td>５施設</td></tr><tr><td>講師氏名</td><td>齋藤桂三・篠塚良子（学校法人彩寿学園）・事務局</td></tr><tr><td>使用教材</td><td>PBL 教材 STEP2</td></tr><tr><td>実施スケジュール</td><td>オンライン講座 1 月 29 日（木）
【1】挨拶（斎藤理事長）（5 分）
【2】施設紹介（5 分）
【3】AI を含む先端機器導入への取組（講義）（10 分）
【4】施設紹介・企画案発表（40 分）
【5】参加者ディスカッション（50 分）
【6】講師講評（5 分）
【7】講座アンケート（5 分）</td></tr></table></td></tr>
</table>

	本講座では、オンライン環境を活用し、介護現場の経営者およびマネージャー５名と施設職員３名が参加し、学習を進める形式で実施された。PBL 教材 STEP2 を使用し、参加５施設の受講者が、企画案の発表や相互評価、ディスカッションを通じて実務に役立つ知識やスキルを習得することができた。 講座は令和 8 年 1 月 29 日（木）17:30～19:30 の時間帯にオンラインで開催した。 この講座では、受講者が STEP1 で開発したｅラーニングシステム上で作成した企画書を発表することで実施した。発表後の意見交換や相互評価を通じた学習効果により企画力の向上が見られた。加えて、講師による生成 AI の活用事例の紹介により、受講者は最新の技術を活用した企画立案の手法も学ぶ機会を得た。 「多国籍共生介護現場の業務で生成ＡＩにできることは何？」教材  企画案　完成の一例（抜粋）


株式会社癒しの森
介護支援AI機器
導入企画提案書

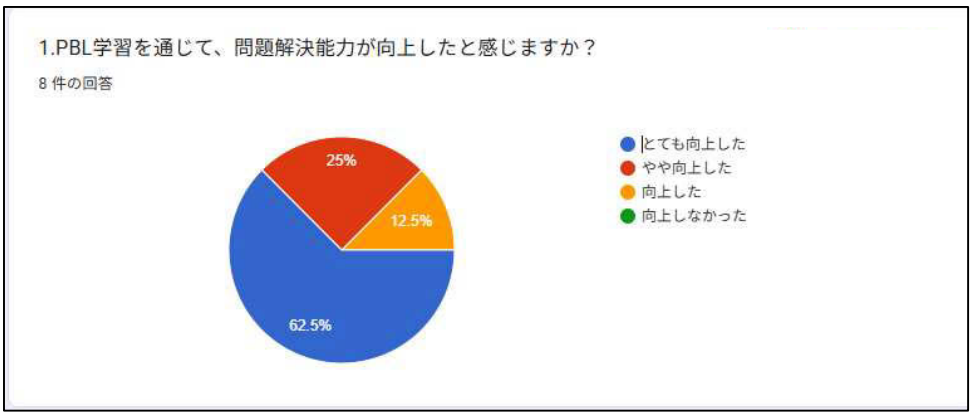

2 現状の課題
（1）不慣れの対応は、長時間必要となることが多く、他の業務を行う時間が不足する等、不慣れ以外の業務に支障が出ることがある。
（2）レクリエーションの内容を毎日考えるが負担になる時がある。
3 購入機器の詳細
（1）製造元 株式会社レイトロン
（2）製品名 音声認識コミュニケーションロボット『Dapi』（ダピット）


03 導入効果と目的（2）
効果①入浴時間の短縮
【導入前】利用者1名の入浴時間：15分
【導入後】利用者1名の入浴時間：12分
1日平均20名の入浴で1人3分時間短縮、1日計60分の時間の確保。
効果②時間外勤務の短縮及びマニュアル整備と研修時間の確保
・管理職や指導職の残業時間を一人当たり１日３０分短縮
・施設内マニュアルの整備や研修時間の確保。
video1976566758

本講座では、PBL 教材 STEP2 を活用し、参加者が実践的に学びを深めることができた。 特に、企画案の発表と相互評価により参加者の企画力が向上した点が評価できる。
講師による AI を含む先端機器活用事例の紹介も、受講者にとって有益な学びとなり、最新技術を取り入れた企画立案の視点を養う機会となった。 特に、企画案 5 事例は対象としたＡＩ機器は異なるが、どれも優れており、すべて有用と評価された点が印象的であった。
全体として、受講者が積極的に参加したことで実践的な学習効果が見られ、今後の業務改善に向けた良い機会であったことがうかがえる。

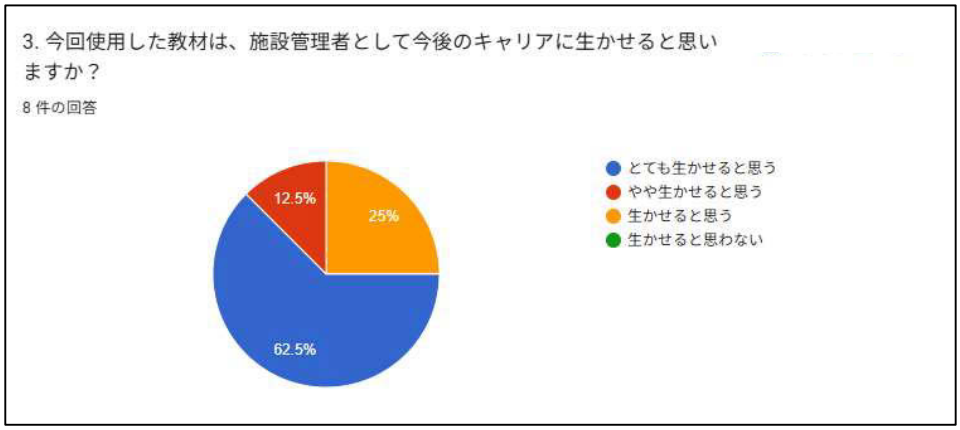
【オンライン講座　1/29　実施後アンケート】（抜粋）

１．PBL 学習を通じて、問題解決能力が向上したと感じるか？



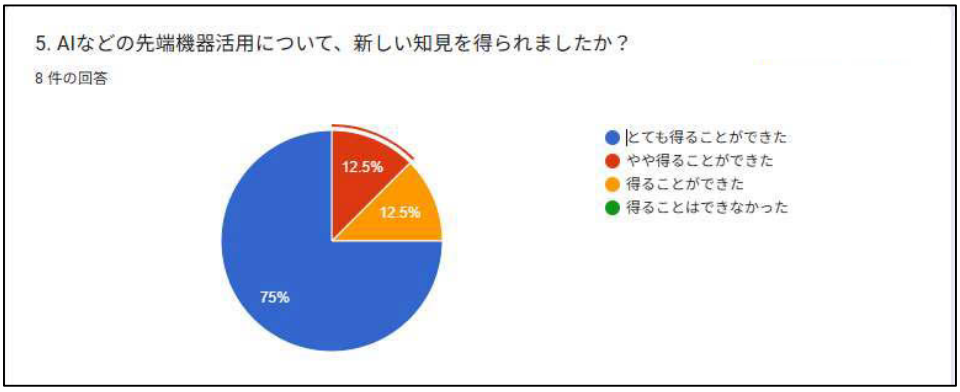
参加者全員が、問題解決能力が向上したと回答した。企画案の発表と相互評価を通じ、広く意見を取り入れることで自らの提案を再確認する機会を得たことが重要な点である。実務に即した学習環境により、現場で検討する課題への対応力が強化されたとがわかる。

３．今回の PBL 教材は施設管理者としてのキャリアに生かせそうか？

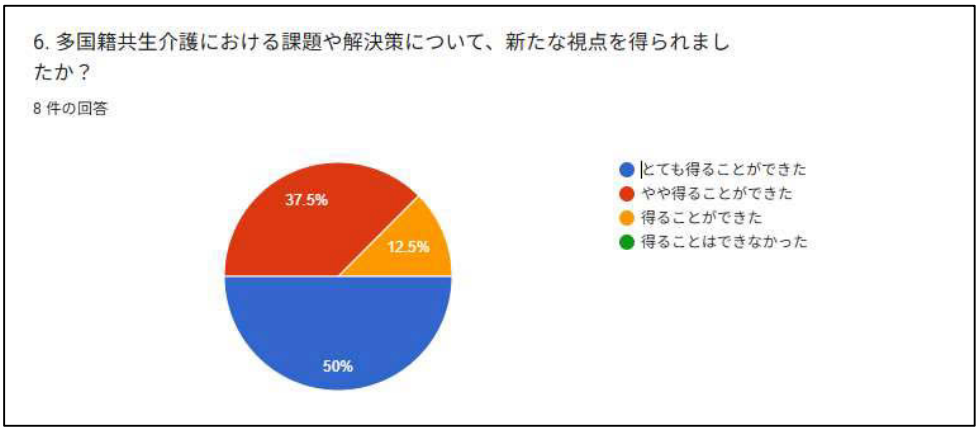


参加者全員が「生かせる」と回答した。相互評価を通じ、受講者が実践的な課題解決力を養い、施設における意思決定力やマネジメントスキルの向上を実現したと考えられる。 実践型学習の継続が、より効果的なキャリア形成につながると期待される。

５．AI などの先端機器活用について新しい知見を得られたか？



参加者全員が「得ることができた」と回答した。他施設が選択したＡＩ機器の活用方法を知ることで、新たな視点や実務の知見を得る機会となったことを示している。 他施設の課題やその解決方法を共有することで、自施設の運営改善に向けて検討されると考えられる。

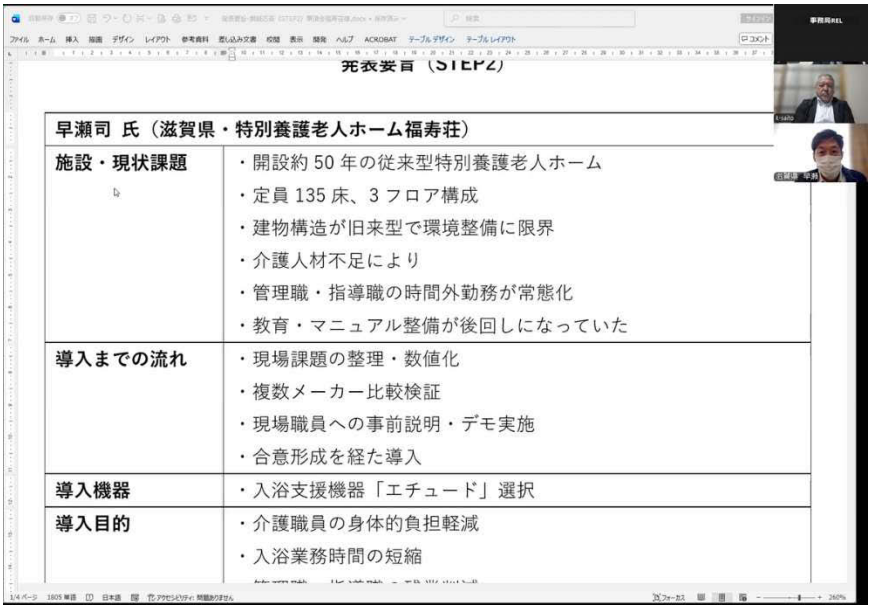
	6．多国籍共生介護における課題や解決策に新たな視点がもてたか？  参加者全員が「視点を得ることができた」と回答した。 PBL 学習段階から多国籍共生介護現場における課題を多様な視点で捉え、実務に応用できる解決策を検討する機会となったことを示している。 特に、他の参加者の意見や異なる施設の事例を共有することで、新たなアプローチや発想が生まれたと考えられる。
受講者数	8 人

<table>
<tr><td>実証講座の対象者</td><td>【ＳＴＥＰ３】
介護現場の経営者およびマネージャーと職員</td></tr>
<tr><td>期　　間</td><td>①特別養護老人ホーム　福寿荘：オンライン講座で実施
令和 8 年 2 月 12 日（木）14:00～15: 00
②癒しの森：オンライン講座で実施
令和 8 年 2 月 12 日（木）16:00～17: 00
③介護付有料老人ホームこころのしろ：オンライン講座で実施
令和 8 年 2 月 16 日（月）14:00～15: 00
④ごきげんリハビリクリニック：オンライン講座で実施
令和 8 年 2 月 19 日（木）17:30～18:30
⑤良創夢デイサービス松川：オンライン講座で実施
令和 8 年 2 月 26 日（木）17:30～18:30</td></tr>
<tr><td>実施手法</td><td>開発した PBL③教材を活用し、介護現場の経営者やマネージャーが、PBL①教材で作成した企画書の修正および内容の充実を行う。実施内容としては、受講者が自身の職場において多国籍共生介護現場を想定して、AI ツールや AI 機器を効果的に活用するための企画書の改訂に取り組み、導入目的、運用方法、期待される効果を具体的に整理する。また、AI 機器を実際の現場で試行的に導入し、その効果と課題を多角的に評価・検証する。さらに、評価結果を基に企画内容の改善を図るとともに、他の施設職員との共有や意見交換を通じて新たな視点を得ることを目指す。ＰＢＬ教材による学習で、現場に即した AI 活用の理解を深め、実装につながる企画立案スキルの向上を図る。</td></tr>
<tr><td></td><td>① 特別養護老人ホーム　福寿荘
<table><tr><td>実施日時</td><td>令和 8 年 2 月 12 日（木）14:00～15:00</td></tr><tr><td>実施場所</td><td>オンライン講座</td></tr><tr><td>参加施設</td><td>特別養護老人ホーム　福寿荘</td></tr><tr><td>講師氏名</td><td>齋藤桂三（学校法人彩寿学園）・事務局</td></tr><tr><td>使用教材</td><td>「多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得のための研修プログラム開発事業」PBL 教材 STEP③</td></tr><tr><td>実施スケジュール</td><td>オンライン講座 2 月 12 日（木）</td></tr></table></td></tr>
</table>

	【1】実施内容確認（5分） 【2】STEP2 講座振返り（20 分） 【3】ブラッシュアップ（20 分） 【4】講評（斎藤理事長）（10 分） 【5】自己評価（5分）
評価	本実証講座の実施後、受講者に対して、講座による成長性や実践力の向上等について、自己評価を行った。

実証講座の様子

（第 3 段階 PBL 教材 STEP③　特別養護老人ホーム　福寿荘）



本段階では、これまでの第１段階（企画提案書作成）および第２段階（各施設による発表と質疑）を踏まえ、作成済みの企画提案書をよりアピール度の高い内容へと改善することを目的として振り返りを実施した。事業全体の考え方として、まず施設の課題を整理し、それを解決する手段として AI 機器を活用した企画書を作成し、その発表と質疑を通して得られた気づきを持ち帰り、最終的により実効性の高い計画書へと修正していく流れで進められている。

まず、提出済みの企画書の内容について振り返りを行い、発表内容の要約に誤りや認識のずれがないかを確認したうえで、他施設から出された複数の質問事項を整理し、それらを企画書にどこまで盛り込むべきかを検討した。質疑は約１０項目程度あり、機器の機能、効果、経済性、運用方法など具体的な実務面に関する

	内容が中心であったため、上位者への提出時にも想定される質問として、必要な事項は追記していく方針が示された。 本企画で選定している AI 機器は、入浴支援機器（自動洗浄・入浴補助機能を備えた機器）であり、全身洗浄が可能である一方、脇や鼠径部など一部の洗浄は補助的な手洗いが必要となる点が共有された。これらの細部については過度に否定的な表現ではなく、「手順の軽減」や「身体的負担の軽減」といった効果として整理し、企画書の訴求力を高める形で記載する方向性が確認された。 経済効果に関する質問に対しては、水道使用量の軽減や入浴工程の効率化、入浴時間の短縮による残業削減の可能性など、具体的な費用対効果を企画書へ追記することが適切とされた。特に、身体的負担の軽減や業務効率化といった定性的効果についても、明確な成果として盛り込むことが望ましいと整理された。 機器選定理由については、複数機種の比較検討を行った経緯や、なぜ当該入浴支援機器を選定したのかを一覧形式などで示すことで、企画の妥当性を高める必要があるとの意見が出された。加えて、設置準備の時間、車椅子洗浄の可否、背部や洗いにくい部位への対応など、実際の運用に関わる具体的事項についても、可能な範囲で企画書に追記していくことが確認された。 一方で、補助金に関する記載については、申請の不確実性や審査期間の長期化など現実的な課題があるため、過度に強調するのではなく、必要最低限の補足にとどめる方針となった。 本事業の重要な視点である多国籍共生介護現場への対応についても議論が行われ、施設には外国人職員が複数在籍していることから、操作がシンプルな入浴支援 AI 機器はボタン操作中心で習得しやすく、外国人職員でも扱いやすい構造である点が利点として整理された。さらに、機器導入により入浴工程が標準化され、職員ごとのケアのばらつきが減少し、ケアの質の均一化につながる可能性があることが確認された。 加えて、今後の課題としては、外国人職員向けの多言語マニュアル整備や操作手順の可視化など、運用体制の整備が必要である

点も企画書に盛り込むべき事項として示された。

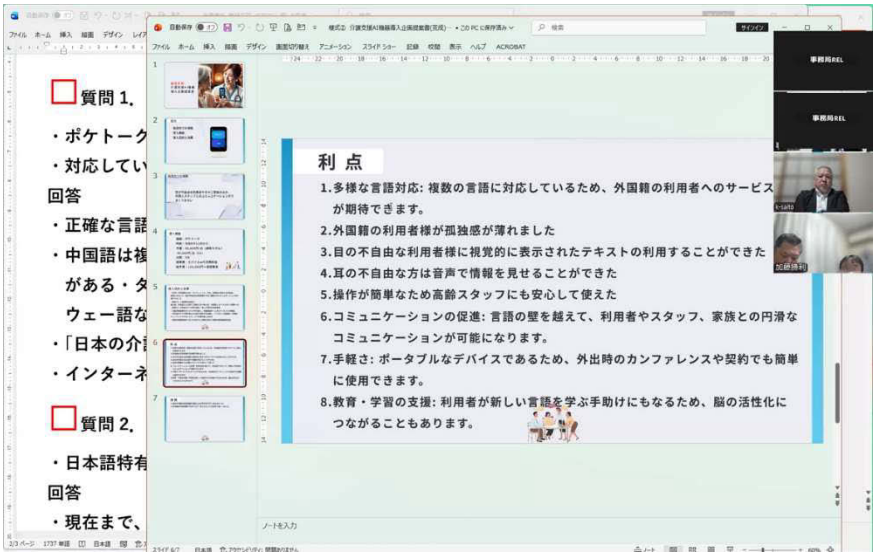
最後に、本プログラムの目的は単なる機器導入ではなく、離職率の低減や業務効率の向上、AI 活用による職場改善に向けた学び直し（リカレント教育）の一環として、施設課題の解決策を具体的に検討することにあると位置づけられた。そのため、第３段階では本日の振り返り内容および質問整理資料をもとに、企画書へ加筆・修正を行い、実効性・説得力・現場適合性を高めた最終企画書へとブラッシュアップしていく方針が確認された。

② 第３段階　癒しの森デイサービスセンター

実施日時	令和 8 年 2 月 12 日（木）15:00～16:00
実施場所	オンライン講座
参加施設	癒しの森　デイサービスセンター
講師氏名	齋藤桂三（学校法人彩寿学園）・事務局
使用教材	「多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得のための研修プログラム開発事業」PBL 教材 STEP③
実施スケジュール	オンライン講座 2 月 12 日（木） 【1】実施内容確認（5 分） 【2】STEP2 講座振返り（20 分） 【3】ブラッシュアップ（25 分） 【4】講評（斎藤理事長）（5 分） 【5】自己評価（5 分）
評価	本実証講座の実施後、受講者に対して、講座による成長性や実践力の向上等について、自己評価を行った。

実証講座の様子

（第３段階 PBL 教材 STEP③　癒しの森　デイサービスセンター）



第３段階では、第１段階で作成した企画提案書について、第２段階の発表や質疑を通して得られた気づきを整理し、内容をより分かりやすく説得力のあるものに整えることを目的として実施した。これまでの流れや、施設の課題解決に向けて AI 機器を活用するという位置づけを改めて確認した上で、企画書の見直しを行った。

まず、先日発表した企画書の発表記録の内容に間違いや認識のずれがないかを確認した。その後、他施設から出た質問や意見をもとに、企画書に追記した方がよい点を検討した。特に、対応言語の多さや実際の使用感について共有され、外国人職員による使用では翻訳精度に驚きがあった一方で、言語の選択が難しい場面があることなど、現場での実情が整理された。

また、日本語の言い回しや方言による誤訳については、現場では大きな問題は出ていないものの、より自動的に言語を判別して翻訳してくれる機能があると使いやすいという意見が出た。在宅や屋外での使用を想定する場合には通信環境や追加費用が課題となる可能性があるとの課題が出た。

さらに、実際の使用場面としては、外国人との会話だけでな

く、耳の聞こえにくい利用者とのコミュニケーションにおいて、音声を文字で表示できる点が有効であることが確認された。一方で、文字の大きさや視認性の問題から、すべての利用者に対応できるわけではなく、ホワイトボードとの併用が必要な場合もあるなど、利点と課題の両面を企画書に整理して盛り込むこととした。

また、端末の配置や管理方法については、特定の職員が常時携帯するのではなく、各デイサービス拠点に設置し、必要時に使用する運用とすべきとされた。

加えて、試用導入による職員数や外国人スタッフの増加といった直接的な変化は見られていないものの、中国人利用者とのコミュニケーションが取りやすくなり、安心感につながったという効果も判明した。今後、多国籍の職員が増えた場合には、外国人同士のコミュニケーション支援としての活用可能性も見えた。

最後に、他の AI 機器の事例についても意見交換を行い、費用対効果や現場での実用性の観点から現実的に導入しやすい機器のあり方について議論があった。本日の振り返り内容や現場での実感、課題点を整理した資料を後日共有し、それらを企画書に加筆・修正することで、より実態に即した分かりやすい企画書へと改善していく方針とした。

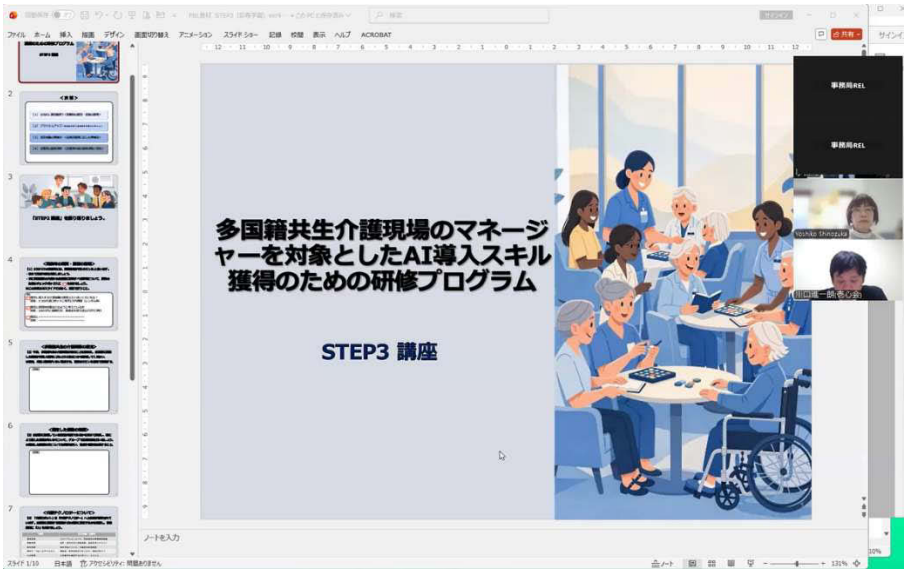
③ 第３段階　介護付き有料老人ホームこころのしろ

実施日時	令和 8 年 2 月 16 日（月）14:00～15: 00
実施場所	オンライン講座
参加施設	介護付き有料老人ホームこころのしろ
講師氏名	篠塚良子（学校法人彩寿学園）・事務局
使用教材	「多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得のための研修プログラム開発事業」PBL 教材 STEP③
実施スケジュール	オンライン講座 2 月 16 日（月） 【1】実施内容確認（5 分） 【2】STEP2 講座振返り（20 分）

	【3】ブラッシュアップ（20 分） 【4】講評（斎藤理事長）（10 分） 【5】自己評価（5 分）
評価	本実証講座の実施後、受講者に対して、講座による成長性や実践力の向上等について、自己評価を行った。

実証講座の様子

（第 3 段階 PBL 教材 STEP③介護付き有料老人ホームこころのしろ）



第 3 段階では、第 1 段階で作成した企画提案書について、第 2 段階の発表内容および質疑応答の振り返りをもとに、内容の正確性の確認と企画書のブラッシュアップを目的として実施した。具体的には、発表時の記録と質問・回答（計 8 項目）を整理し、企画書に盛り込むべき事項（特に質問 2・3・6 に該当する使用後の効果や具体的な使用感）を中心に再検討する流れで進められた。

まず、先日第 2 段階で発表した企画内容と記録の内容に誤りや認識のずれがないかを確認し、そのうえで他施設からの質問を整理し企画書に追記すべき具体的事項の検討を行った。本事業では、これまで選定してきた AI 機器として、利用者の不穏時対応や認知症ケアを目的とした対話型コミュニケーション AI 機器（例：対話ロボット・音声対話型 AI 機器〔チャビット等の会話

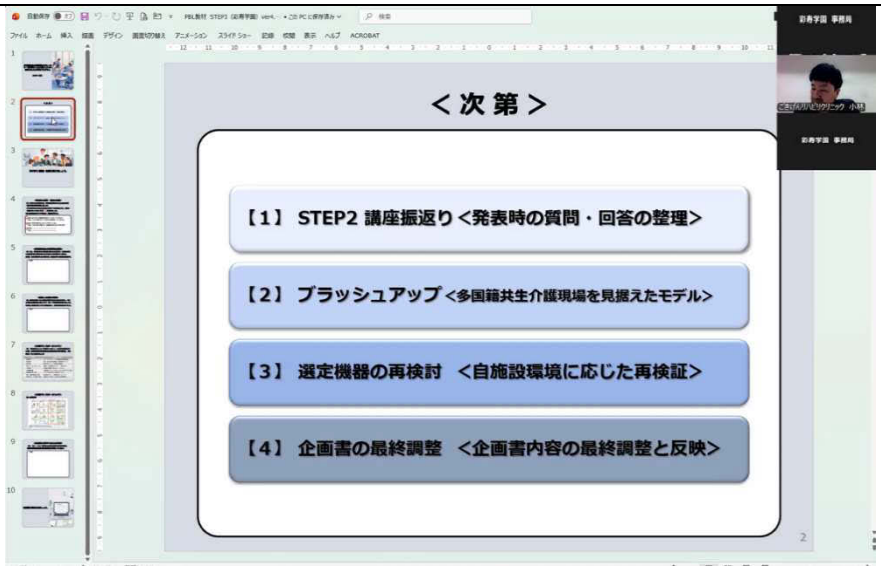
	支援機器〕）を中心に試用しており、当初の目的である「認知症利用者の安心感の向上およびコミュニケーション支援」という位置づけを改めて確認した。 　試用の結果、設定は特定職員に限定せず現場で共有して使用でき、操作負担も少なく日常業務の中で活用可能であることが確認された。また、認知症や不穏傾向のある利用者には安心感や落ち着きにつながる一方、認知機能が保たれている利用者には効果に差が見られるなど、対象者によって有効性が異なる点を企画書に反映する必要があると整理された。 　さらに、多国籍共生の視点から AI 機器の役割を再検討した結果、対話・翻訳機能を活用することで、外国人職員と利用者・職員間の意思疎通を支援するコミュニケーション補助ツールとしての有効性が期待でき、企画の強みとして位置づける方針とした。具体的な企画案としては、 ・対話型 AI コミュニケーション機器（例：会話ロボット・音声 AI 端末）の各デイサービス拠点への設置 ・不穏時やコミュニケーション困難時の補助機器としての活用 ・外国人職員と利用者間の意思疎通支援（多言語音声対話・翻訳補助） ・職員の精神的負担軽減およびケアの質向上を目的とした補助的運用 　といった運用方針を明確化することとした。 　加えて、現段階では１フロア１台の試用であり、台数の妥当性や配置方法については現状維持で検討しつつ、必要に応じて追加導入の可能性を検証する方針とした。また、今後の方向性としては、①現行機器（対話型 AI）の本格導入、②再試用による効果検証、③多国籍対応をより強化できる別の AI 機器（翻訳支援端末等）の再選定、の３案を比較検討しながら最終的な企画書に反映していくことが確認された。 　最後に、本日の振り返りで整理した「使用後の具体的効果」「対象利用者の適合性」「多国籍共生現場における活用意義」等を企画書に加筆・修正し、単なる機器導入計画ではなく、施設課

題（認知症対応・人材不足・多言語対応）を AI 機器で補完する実践的な導入企画として、より分かりやすく説得力のある内容へと改善していく方針とした。

④ 第３段階　ごきげんリハビリクリニック

実施日時	令和 8 年 2 月 19 日（木）17:30～18:30
実施場所	オンライン講座
参加施設	ごきげんリハビリクリニック
講師氏名	学校法人彩寿学園 事務局
使用教材	「多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得のための研修プログラム開発事業」PBL 教材 STEP③
実施スケジュール	オンライン講座 2 月 12 日（木） 【1】実施内容確認（5 分） 【2】STEP2 講座振返り（20 分） 【3】ブラッシュアップ（25 分） 【4】講評（斎藤理事長）（5 分） 【5】自己評価（5 分）
評価	本実証講座の実施後、受講者に対して講座による成長性や実践力の向上等について自己評価を行った。

実証講座の様子
（第３段階 PBL 教材 STEP③　ごきげんリハビリクリニック）



第３段階では、第１段階で作成した企画提案書および第２段階（各施設リーダーによる発表・質疑）の内容を踏まえ、講座の振り返りを中心に企画書のブラッシュアップを目的として実施された。これまでの流れとして、①企画提案書の作成、②５施設による発表と質疑応答を経て、③第三段階では振り返り・修正・機器の再検討・最終的な企画書の仕上げというプロセスで進める方針が示された。

まず、前回（1 月 29 日）の発表内容を整理し、各施設の現状、導入予定の AI 機器、導入目的、導入プロセス、費用、リスクと対策といった項目について再確認を行った。今回の企画では、AI 機器として清掃支援型 AI ロボット（業務用清掃ロボット「ウィズ」等）を導入する想定で企画書が作成されており、施設の業務負担軽減と環境整備の効率化を目的とした導入計画として位置づけられている。

次に、第２段階で出された質疑応答の内容を精査し、企画書に盛り込むべき事項の抽出が行われた。質疑が生じたということは、企画書内に十分に説明されていない要素がある可能性があり、上位決裁時にも同様の質問が想定されるため、事前に回答内容を企画書へ反映させる必要があるとの整理がなされた。

具体的な検討事項として、まず清掃ロボットの運用時間について議論が行われ、利用者がいる時間帯での稼働は安全面の課題が

	あることから、夜間や無人時間帯での運用が現実的であるという方向性が確認された。また、夜間稼働の場合には防犯センサーや警備システムとの干渉が課題となる可能性があり、セキュリティ面のリスクと対策を企画書の「リスク管理」の項目に追記する必要があると整理された。 施設構造（１階・２階のフロア構成）や既存の清掃機器（ルンバ等）の使用状況も踏まえ、AI 清掃ロボットは既存機器では対応しきれない清掃範囲の拡大や清掃能力の向上が期待できる点を明確に記載する方針とされた。特に、セキュリティがかかっていないフロアでの運用や、人的清掃負担の軽減といった具体的な活用場面を想定し、実態に即した導入計画として整理することが求められた。 機能面については、自動回収機能・水拭き機能・騒音・傾斜対応などの仕様については、実際の資料やメーカー情報の再確認が必要であり、「試用して検証する事項」として段階的に記載することが適切であるとの判断が示された。現時点で未使用の項目（反応や実際の使用感など）については、本格導入前に試用期間を設け、その結果を企画書の根拠資料として補強する方針となった。 加えて、本事業の前提である「多国籍共生介護現場における AI 機器活用」という視点も重要な追記項目として提示された。現状は外国人職員がいない施設であっても、今後の人材確保を見据え、操作が簡便で言語の壁が少ない清掃ロボットは外国人職員でも扱いやすく、業務の標準化や業務理解の促進につながる可能性がある点を企画書に盛り込むことが求められた。 費用面については本体価格が高額である一方、レンタルや試用導入の可能性も含めて現実的な導入方法を検討する必要があるとされ、１～２か月程度の試用導入を行ったうえで効果検証を行う段階的導入案も検討対象となった。 最後に、第３段階の大きな検討視点として、 ・企画書の訴求力向上に向けた記載内容の修正 ・多国籍共生現場における AI 機器活用の意義の整理

・選定機器（清掃ロボット）が施設に適正かの再評価および他の介護テクノロジーの再検討の三点を中心に再考し、資料を参照しながら企画書を練り直していく方針が確認された。これにより、実態・質疑・現場運用を踏まえた、より説得力と実現可能性の高い企画提案書へと改善していく段階であると位置づけられる。

⑤ 第３段階　良創夢デイサービスセンター松川

実施日時	令和 8 年 2 月 26 日（木）14:00～15: 00
実施場所	オンライン講座
参加施設	良創夢デイサービスセンター松川
講師氏名	篠塚良子（学校法人彩寿学園）・事務局
使用教材	「多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得のための研修プログラム開発事業」PBL 教材 STEP③
実施スケジュール	オンライン講座 2 月 12 日（木） 【1】実施内容確認（5 分） 【2】STEP2 講座振返り（20 分） 【3】ブラッシュアップ（20 分） 【4】講評（篠塚校長）（10 分） 【5】自己評価（5 分）
評価	本実証講座の実施後、受講者に対して、講座による成長性や実践力の向上等について、自己評価を行った。

実証講座の様子
（第 3 段階 PBL 教材 STEP③　良創夢デイサービスセンター松川）

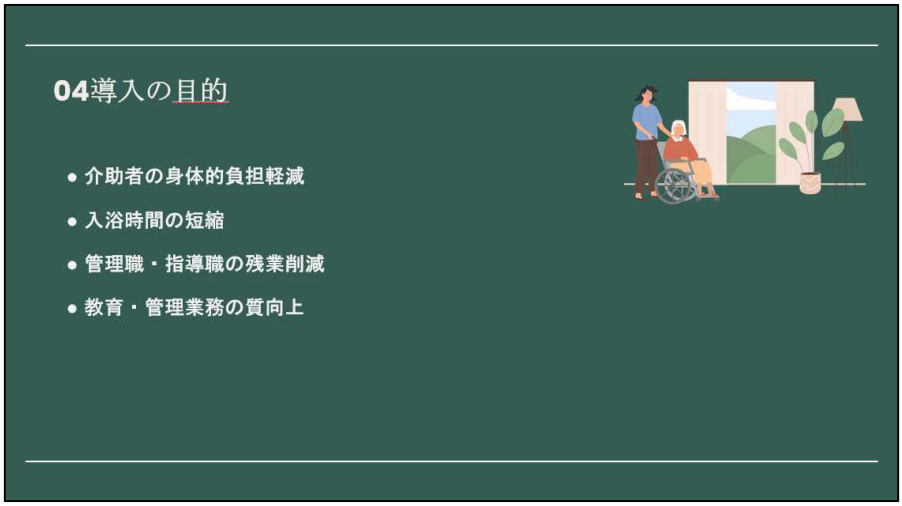


第３段階では、第１段階で作成した企画提案書および第２段階の発表・質疑応答を踏まえ、企画書をより充実させ訴求力の高い内容へとブラッシュアップすることを目的として実施された。事業の流れとしては、①企画書の作成、②１月末の発表と他施設からの質問・意見の収集、③その気づきを企画書へ反映する振り返り段階という位置づけで進められている。

本企画では、デイサービスにおける送迎業務の負担が大きいという現場課題を背景に、AI 送迎計画システム（ドライブボス等の送迎ルート自動作成・最適化システム）を選定し、送迎計画作成時間の削減や業務効率化を図る企画案として整理されている。施設では職員不足や残業増加、利用者家族への時間的負担などが課題となっており、AI による最適ルート作成やスマートフォン・タブレットとの連動機能を活用することで、送迎計画の効率化と安全性向上を目指す内容であることが改めて確認された。

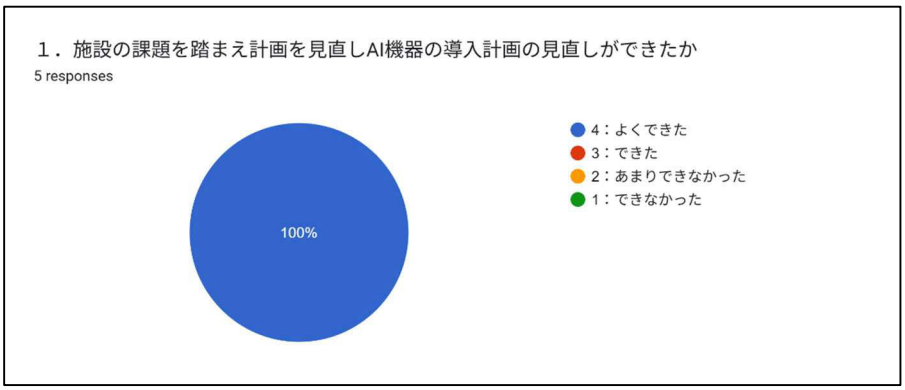
振り返りでは、発表時に他施設から出された質問内容を整理し、それらを企画書にどこまで盛り込むべきかを検討した。具体的には、「すでに導入しているのか」「細い道や車両制限のある場所への対応」「利用者ごとの条件設定」「当日欠席時のルート変更」など、実運用に関する質問が多く挙げられており、これらは企画書の説明を補強する重要な視点として位置づけられた。質問が出たということは、企画書の説明をより具体化する余地がある

	ことを意味し、回答内容を追記することで内容の説得力を高められるとの認識が共有された。 　また、システム機能については、利用者の状況（車椅子利用、進入困難な道路など）を事前に設定できる可能性や、ナビゲーションと同様に細い道を回避するルート作成機能が想定されることが整理されたが、現時点では未導入であるため、実際の使用感や詳細機能については試用による検証が必要であるとの結論となった。そのため、「実際に使用して検証予定」という段階的導入の視点を企画書に明記する方針が確認された。 　さらに、当日欠席者が出た場合の対応については、完全自動再編成というよりも、現場判断で次の利用者へ向かう運用や事前連絡による調整が現実的であると整理され、AI システム単独ではなく既存の運用と併用する前提で活用する必要性が示された。突発的な渋滞や事故などへの対応についても同様に、過度な自動化に依存せず、人による補足対応を含めた現実的な運用設計を企画書に反映することが望ましいとされた。 　また、最も期待される効果としては、送迎計画作成に現在 1 時間以上かかっている業務を数分程度に短縮できる可能性があり、これにより職員の業務負担軽減、残業削減、働きやすい職場環境の形成につながる点が強調された。送迎業務の見直しを通して、利用者対応や書類業務に充てる時間の確保が可能となり、サービスの質向上にも寄与するという効果が企画の中心的意義として再整理された。 　加えて、本事業の前提である「多国籍共生介護現場」の視点についても確認が行われ、現時点では外国人職員が少ない状況であっても、今後の採用可能性を見据え、操作が簡便な AI システムは外国人職員にも活用しやすく、業務の標準化や引き継ぎの円滑化に寄与する可能性がある点を企画書に盛り込むことが提案された。 　最後に、本取り組みを通じて送迎業務に多くの時間が費やされているという課題が可視化され、職員間で業務の見直しを具体的に議論できたこと自体が大きな成果として共有された。今後は、

	費用面（レンタルや助成金の活用を含む）や試用導入の検討を進めつつ、今回の振り返り内容や質疑で得られた気づきを企画書へ加筆・修正し、現場の実態に即した実現可能性の高い最終企画書へと改善していく方針とされた。 企画案　完成の一例（抜粋）   【オンライン講座　第３段階　実施後アンケート】（抜粋） 第３段階講座の実施効果を把握し、受講者が施設課題の整理、AI機器（入浴支援機器・対話型 AI・翻訳端末・清掃ロボット・送迎 AI 等）の活用意識、振り返り力、多国籍共生の視点をどの程度身

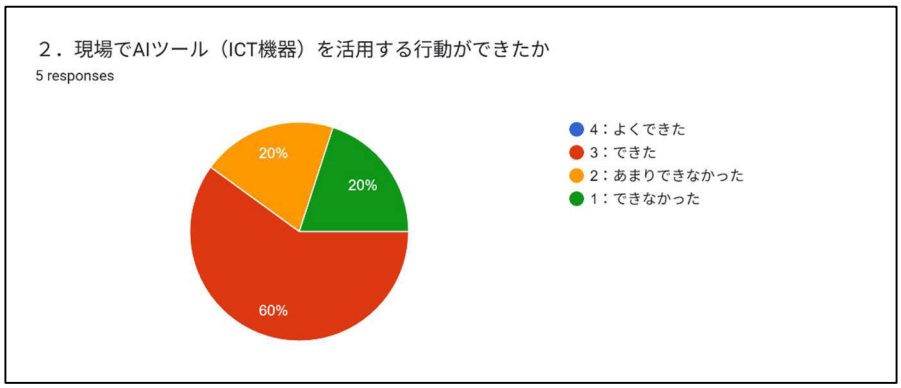
に付けたかを検証することを目的として実施したものである。あわせて、今後の企画書改善や実践導入に向けた課題抽出とプログラムの有効性評価の基礎資料とすることを狙いとしてアンケートを実施した。

1．施設の課題を踏まえ計画を見直し AI 機器の導入計画の見直しができたか



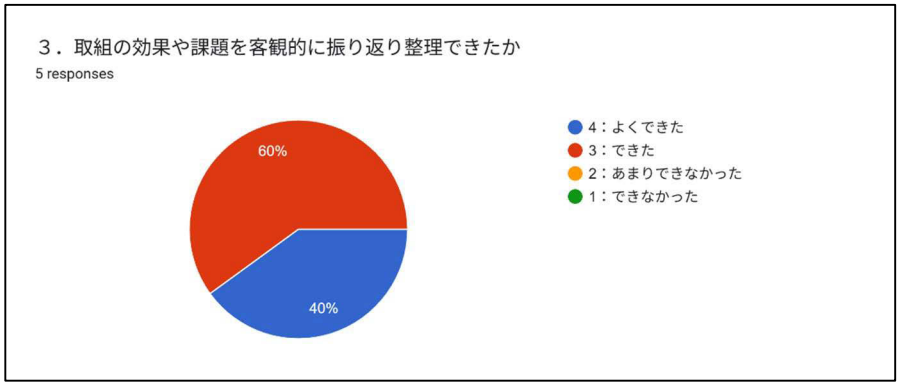
各施設とも課題を踏まえた導入計画の見直しが概ねできており、入浴支援機器、対話型コミュニケーション AI、清掃ロボット、送迎計画 AI システムなど、施設特性に応じた機器選定の再検討が進んだ点は大きな成果である。質疑を踏まえ、機能・費用対効果・運用方法を具体的に追記できており、実現可能性の高い計画へとブラッシュアップされたと評価できる。

2．現場で AI ツール（ICT 機器）を活用する行動ができたか



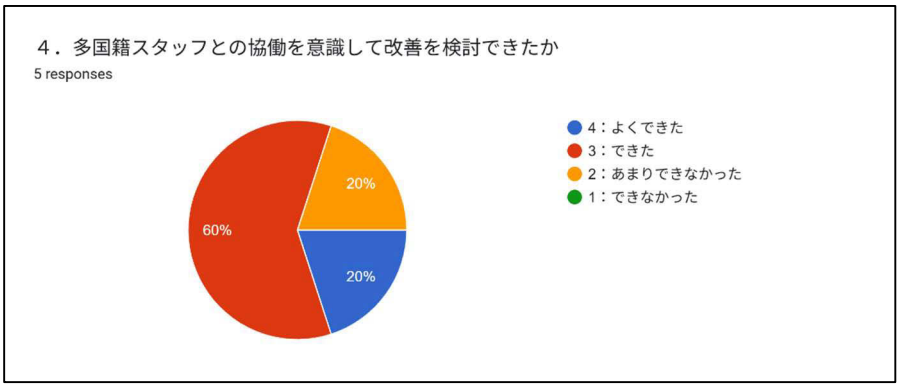
現場での AI ツール活用については、翻訳支援端末や対話型 AI 機器の試用、清掃ロボットの運用想定検討、送迎ルート最適化システムの活用検討など、具体的な行動につながっている点が評価できる。一部は試用段階ではあるが、実業務を想定した活用意識が醸成されており、実践導入への基盤が形成されつつある。

３．取組の効果や課題を客観的に振り返り整理できたか



入浴支援機器による身体的負担軽減、対話型 AI による認知症利用者の安心感、翻訳機器による多言語対応、清掃ロボットによる業務負担軽減など、機器ごとの効果と課題を具体的に整理できている点が高く評価できる。実使用を想定した利点・制約の両面を振り返ることで、現場適合性の高い企画内容へと深化している。

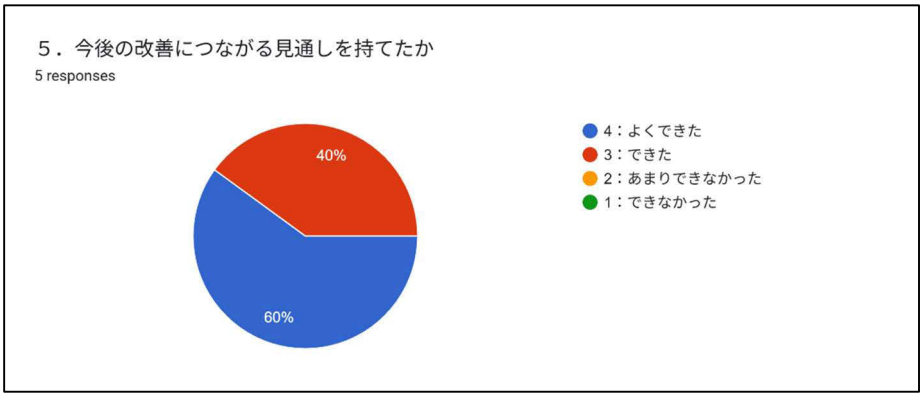
４．多国籍スタッフとの協働を意識して改善を検討できたか



多国籍スタッフとの協働の視点では、操作が簡便な入浴支援機器や清掃ロボット、翻訳機能を持つ ICT 機器の活用を前提とした検

討が進み、多言語環境でも活用しやすい機器選定が意識されている。外国人職員でも扱いやすい標準化された業務運用の検討につながっている点は本事業の目的に合致している。

５．今後の改善につながる見通しを持てたか



今後の改善見通しについては、試用導入による効果検証、機器の再選定、段階的導入（レンタル・小規模導入）など、具体的な発展方向が明確になっている。AI 入浴機器、対話型 AI、清掃ロボット、送迎 AI システムの実証を通じ、業務効率化と職員負担軽減を見据えた継続的改善の道筋が示された点は実践的成果といえる。

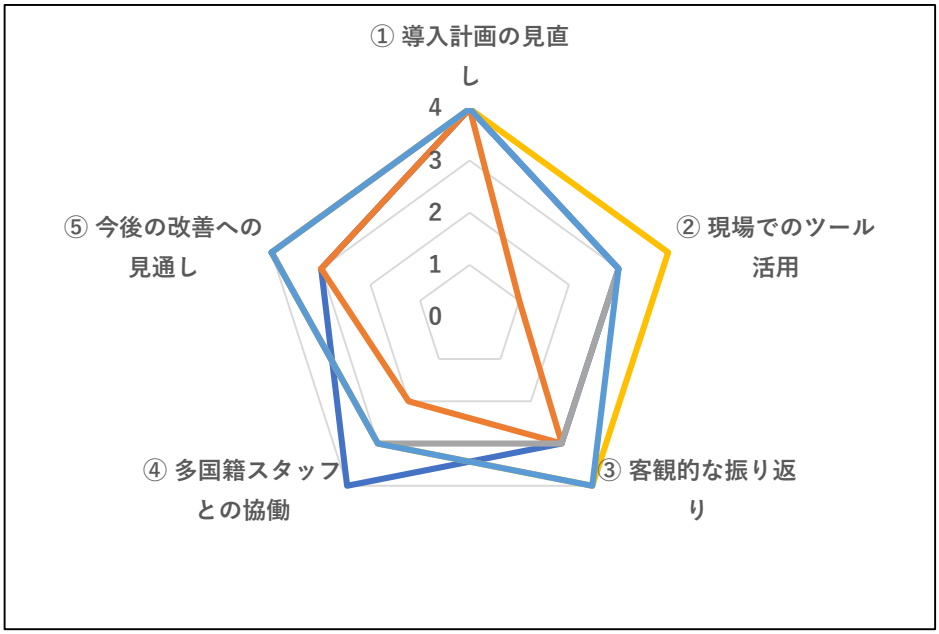
【講評】

本アンケート結果から、AI 導入計画の見直しおよび今後の改善に関する見通しについては全施設が肯定的に回答しており、研修が各施設における課題の再整理や導入方針の再確認に寄与したことが明らかとなった。特に、AI 活用の目的や段階的導入の必要性について共通理解が形成され、計画立案に対する具体的な視点が共有された点は大きな成果である。一方で、現場での AI ツールの実際の活用状況や、多国籍スタッフとの協働における実践レベルには施設間で一定のばらつきが見られた。これは、組織体制や人的資源、ICT 環境の整備状況の違いが影響している可能性がある。今後は、実践事例の共有やフォローアップ研修の実施、運用体制の明確化を通じて、現場への定着を支援するとともに、継続

的な環境整備を進めることが重要であると考えられる。

【第３回段階の自己評価】

自己評価の結果



多国籍スタッフとの協働を見据えた視点

本事業の核となる「多国籍共生」の観点では、AI 機器を外国人職員の定着と業務標準化のツールとして捉える議論が深まった。操作がシンプルな機器（入浴支援や清掃ロボット）は、言語の壁を越えて習得が容易であり、ケアの質の均一化に寄与する点が強調されている 。また、対話型 AI や翻訳端末においては、外国人職員と利用者間の意思疎通を支援する補助ツールとしての有効性を再認識し、多言語マニュアルの整備や操作手順の可視化といった、受け入れ体制側の具体的な課題も企画書に反映された 。

アンケートに基づく自己評価と成果

受講後の自己評価によれば、全施設が「導入計画の見直し」において最高評価（4 点）を付けており、課題整理能力の向上が顕著であった。現場での AI 活用については施設間でばらつきが見られるものの、翻訳支援端末や対話型 AI の試用、清掃ロボットの運用想定など、具体的な行動へと繋がっている点は高く評価でき

	る。取組の効果と課題を客観的に振り返り、利点と制約の両面を整理できたことで、現場適合性および実現可能性の高い企画内容へと深化を遂げている。 **総括と今後の展望** 全体を通して、本研修は各施設における課題の再整理と AI 導入方針の確立に大きく寄与した。今後は、講座で示された「試用導入による効果検証」や「レンタル・小規模導入などの段階的導入」の方針に基づき、実際の現場定着を図ることが肝要である 。特に多国籍スタッフとの協働においては、操作の簡便性や多言語機能を活かしつつ、運用体制を明確化することで、離職率の低減や業務効率の向上という最終目標の達成を目指すべきである 。
受講者数	8 人

●リカレント教育プログラムの実施における工夫
◎e ラーニングにおけるソーシャルラーニング機能の実装
一般的に非同期型の ｅ ラーニングを用いた教育プログラムは、モチベーションの維持が困難であることが一因となり、受講者の修了率が低い傾向にある。さらに、業務を抱えている社会人であれば、その傾向は強くなり得る。
そこで、本事業の ｅ ラーニングには通常のラーニングマネジメント機能（教材や CBT の実装、学習履歴の管理等）だけでなく、受講者同士でのメッセージやグループでのやりとり、情報や成果物の共有とそれに対するリアクションを可能にするソーシャルラーニング機能を実装した。これにより、受講者は特に個人での学習や作業が多い PBL の第１段階においても協働学習を行うことができるため、モチベーションの維持につながる効果が期待できる。



◎会議のオンライン対応
本事業には様々な地域の機関が連携機関として参画している。したがって、対面の会議実施に限定すると出席が困難な機関も出てくる可能性が想定される。そこで、本事業の会議では可能な限りオンラインでの出席も可能な環境を整えた。それにより、対面とオンライン併用の形式で多くの連携機関が出席できるよう配慮した。

●検証における工夫
◎効果検証の実施
本事業で開発するリカレント教育プログラムを効果的に実施するために、その教育効果を検証した。効果検証にあたっては、以下のような項目と方法を想定した。なお、この項目は後述の KPI にも反映し、同期をとった。

〇学習内容の定着度　：教材の内容に即したテストを実施し、合格基準点に達

した受講者の割合をもって検証した
〇受講者からの評価　：実証講座後の受講者アンケートにおいて、実証講座に関して肯定的な回答が選ばれた割合から検証した
〇介護施設からの評価：学習内容や実証講座の成果に関して評価を依頼し、肯定的な回答が選ばれた割合から検証した

◎効果検証の体制

本事業では、分科会が上記のような効果検証の項目と方法について詳細化・具体化を行った。それを実施委員会にて報告し、承認を受けた。また、実証講座後の結果分析も分科会が実施した。分科会は実証講座の成果について報告書を作成し、介護施設や介護業界団体がそれを評価した。このように分科会・実施委員会・介護施設や介護業界団体の三者による効果検証の体制を構築した。

●事業実施に伴う成果物（成果報告書を除く）

【令和 5 年度】

調査報告書	令和 5 年度に実施するアンケート、ヒアリング、事例調査の結果をまとめた報告書
カリキュラム	本事業で開発するリカレント教育プログラムのカリキュラム
評価指標	受講者の知識・スキル・コンピテンシーを評価するための指標
プロトタイプ教材	e ラーニング教材と PBL 教材の試作となるプロトタイプ
プレ実証講座報告書	プロトタイプ教材を活用する令和 5 年度のプレ実証講座の報告書
成果報告書	令和 5 年度の取組と成果をまとめた報告書

【令和 6 年度】

シラバス	本事業で開発するリカレント教育プログラムのカリキュラム内の科目の詳細なシラバス
教材	令和 5 年度のプレ実証講座の結果をもととした教材の改訂版と追加開発した教材
実証講座報告書	開発した教材を活用する令和 6 年度の実証講座の報告書
成果報告書	令和 6 年度の取組と成果をまとめた報告書

【令和 7 年度】

講座の手引き	カリキュラム、シラバス、評価指標等をまとめた講座全体の

	説明書
教材	令和 6 年度の実証講座の結果をもととした教材の改訂版と追加開発した教材
実証講座報告書	開発した教材を活用する令和 7 年度の実証講座の報告書
多国籍共生介護現場コミュニティ	教育プログラムの受講者や修了者を中心として成果や情報を共有するコミュニティ
成果報告書	令和 7 年度の取組と成果をまとめた報告書

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として≪学校法人彩寿学園≫が実施した令和 6 年度「専門職業人材の最新技能アップデートのための専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業」の成果をとりまとめたものです。

令和 7 年度
専門職業人材の最新技能アップデートのための
専修学校リカレント教育（リ・スキリング）推進事業

事業成果報告書多国籍共生介護現場のマネージャーを対象とした AI 導入スキル獲得のための研修プログラム開発事業

令和 8 年 3 月
学校法人彩寿学園